

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 5 集

— 大崎城跡・万喜城跡発掘調査報告 —

昭 和 59 年 度

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県内には、数多くの中近世遺跡が所在し、それにまつわるさまざまな史実、伝説も伝えられています。千葉県教育委員会では、昭和45・46年に中近世遺跡の分布調査を実施しました。その結果、県内に586か所の所在を確認し、その成果を「千葉県中近世遺跡調査目録」として刊行しました。その中で、城館跡に関しては、文献史料による研究がかなり進められておりますが、規模、構造、性格等の実態についての調査はほとんど行われていないのが実情です。

そこで、千葉県教育委員会では、昭和55年度から、5か年計画で中近世城館跡のうち重要性が高くかつ開発等の影響を受ける恐れがあるものを選び、その規模、構造等を把握し、保存策を講ずる資料を得る目的で、測量、確認調査を実施してきました。

今年度は、佐原市大崎城跡、夷隅町万木城跡の2か所について調査を実施し、主要部について、規模、構造を明らかにすことができました。特に大崎城跡は、当初予想されていた範囲を大幅に上回る城域が確認され、万木城跡においても、本丸跡で建物跡、炭化米等が検出され、従来の見識に新しい事実を付け加えることができました。

このたび、調査概報を刊行する運びとなりましたが、この報告書が学術資料としてはもとより、文化財保護の上で多くの方々に利用されることを期待しております。特に関係市町村教育委員会におかれましては、今後の保護・活用の上で積極的に利用されることを希望します。

終りに、調査にあたって多大な御協力をいただいた佐原市、夷隅都市圏教育委員会をはじめ地元関係者の方々、調査を担当された財團法人千葉県文化財センターの職員及び調査補助員の方々の御労苦に対し、心から感謝の意を表します。

昭和60年3月30日

千葉県教育庁文化課長

齊藤 浩

凡 例

1. 本書は、佐原市大崎所在の大崎城跡（遺跡コード209-031）及び夷隅郡夷隅町万木所在の万喜（万木）城跡（遺跡コード442-001）の確認調査概要報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助（総額5,000,000円、補助率50%）を受けて調査を勧千葉県文化財センターに委託し実施したものである。
3. 調査は、大崎城跡が昭和59年10月22日～10月29日、万喜城跡が昭和59年11月10日～11月19日まで実施した。なお地形測量は京葉測量株式会社に委託し、実施した。
4. 調査および整理作業にあたっては、大崎城跡を石倉亮治が、万喜城跡を伊藤智樹が担当した。その他に柴田龍司、小高春雄、渡辺智信、鈴木普二男の協力を得るところ大であった。
5. 調査に当たって、大崎城跡については、佐原市教育委員会の関係者各位、土地所有者金子宗一郎氏、金子力造氏、高木和夫氏、本城正男氏、および、地元大崎地区の方々の御協力があった。また、万喜城跡については、夷隅郡教育委員会、夷隅町産業課、總南博物館の関係者各位、万木地区区長平山久夫氏、および、地元万木地区の方々、川城昭一氏、關口廣次氏の御協力があった。各々記して謝意を表する。
6. なお、万喜城跡は現在夷隅町の史跡であり、名称は「万木城」となっている。昭和58年度版『市町村文化財保護行政基本調査』でも「万木城」となっている。しかし、『千葉県中近世遺跡調査目録』（1971）、『日本城郭大系』第6巻（1980）では「万喜城」となっており、他の文献でも「万喜城」とする例がおおいので、本報告でも名称を万喜城とする。

目 次

序 文

凡 例

I. 佐 原 市 大 峙 城 跡

1 . 大崎城跡の位置と地理的環境.....	1
2 . 大崎城周辺の寺跡と歴史的環境.....	1
(1) 大崎城周辺の寺跡.....	1
(2) 歴史的環境.....	6
3 . 大崎城跡の概観と構造.....	8
(1) 構造の概観.....	8
(2) 城跡の構造.....	10
4 . 発掘調査と概要.....	12
(1) 調査方法と経過.....	12
(2) 出土遺物.....	17
5 . 結 語.....	20

挿 図 目 次

I - 1 図 白田七郎右衛門記『矢作古城跡之図』及び絵図解説.....	2
I - 2 図 大崎城跡周辺概念図（佐原市平面図37使用）.....	3
I - 3 図 大崎城跡周辺の主な城跡と寺跡.....	5
（国土地理院「佐原」「潮来」「成田」「八日市場」1/50,000使用）	
I - 4 図 大崎城跡縄張概念図.....	11
I - 5 図 大崎城跡発掘調査トレンチ配置図.....	13
I - 6 図 大崎城跡トレンチ平面図及び土層断面図.....	15
I - 7 図 大崎城跡出土遺物（縮尺1/2）.....	18
I - 8 図 大崎城跡出土遺物（縮尺1/2）.....	19
I - 9 図 大崎城跡測量図.....	21

図 版 目 次

図版 I - 1 空から見た大崎城跡（縮尺1/13,000）

図版 I - 2 大崎城跡遠景

図版 I - 3 A地区調査前風景、第1トレンチ、第2トレンチ

- 図版 I - 4 第1トレンチ、拡張区、A地区調査風景
 図版 I - 5 B地区調査前風景、第4トレンチ、第5トレンチ
 図版 I - 6 B地区第6トレンチ、第一郭周辺の遠景近景
 図版 I - 7 第一郭内曲輪、矢倉、周辺の空塗その他
 図版 I - 8 大崎城跡出土遺物

II. 真 隅 町 万 喜 城 跡

1 . 万喜城跡の位置と地理的環境.....	45
2 . 万喜城跡周辺の城跡と歴史的環境.....	45
(1) 戦国時代以前の真隅.....	45
(2) 万喜城と土岐氏.....	48
3 . 万喜城跡の概要.....	51
(1) 城跡の概観.....	51
(2) 城跡の周辺.....	54
4 . 発掘調査とその概要.....	56
(1) 調査方法と調査経過.....	56
(2) 調査区の概要.....	58
5 . 結 語.....	64

挿 図 目 次

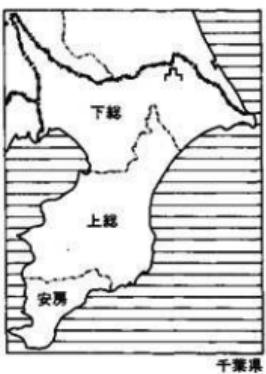
II - 1 図 万喜城跡と周辺の主な城跡・寺院.....	46
II - 2 図 万喜村絵図.....	55
II - 3 図 万喜城跡発掘区設定図.....	57
II - 4 図 1区（II郭）遺構検出状況図.....	59
II - 5 図 トレンチ断面図及び遺構実測図.....	61
II - 6 図 トレンチ出土の遺物	63
付図 1 万喜城跡地形測量図（部分）	
付図 2 万喜城跡概念図及び縦断図	

図 版 目 次

- 図版II - 1 空から見た万喜城跡
 図版II - 2 1区（II郭）第1トレンチ・第2トレンチ

- 図版II-3 1区（II郭）第2トレンチ・第3トレンチ
- 図版II-4 2区（I郭）第1トレンチ・第2トレンチ
- 図版II-5 2区（I郭）第3トレンチその他
- 図版II-6 浅間台周辺及び土岐氏墓誌
- 図版II-7 万喜城跡出土遺物

I 佐 原 市 大 崎 城 跡



I 佐原市大崎城跡

1. 大崎城跡の位置と地理的環境 (I - 1 図)

大崎城跡は、佐原市の南部に位置し地縁は大崎字城ノ内他である。城跡は小野川支流の香西川上流域に広がる水田に挟まれた半島状の台地の北端に位置している。

佐原市在住の本城正男氏蔵の『矢作古城跡之図』によれば、現在整然と区画整理された周囲の水田も、かつては沼沢状の湿地帯を形成していたものと考えられる。また、城跡の所在する台地は標高35m前後の丘陵部が細長く南に連なり、香西地区を経て本矢作の集落のある台地へと伸びている。絵図によれば、城跡に付随する古道は弘化3年(1846)当時与倉村及び観音村に通ずるものと、同じ大崎村内のもう一つの半島状に突き出た台地を経て東方対岸の大根村へと通ずるもののが確認されている。偏長な台地を南に伸びる古道は、台地の内陸部を通過し本矢作の集落へ向うものと、一端谷津に出て長山村を経た後に本矢作の集落へと向うものの記載も見られる。

このように、大崎城跡は、湿地帯を挟んで対峙する周囲の台地とは2ヵ所の道によって連絡を保つのみであったことがわかる。湿地帯の水位の上昇した場合には、城跡の所在する台地は自然の濠に囲まれた島となって南に連なる台地以外にはその連絡を遮断することができる。

なお、大崎在住の金子宗一郎氏によれば、周囲の水田は大変に深いためかつて歩いて渡ることは困難であったが石崎地区には歩いて渡ることのできる場所があり、その場所には石か砂が敷き詰めてあるらしいとのことである。石崎地区の対岸は觀福寺のある牧野の台地であり、緊急時の避難路であった可能性も考えられる。

国分氏初代の五郎亂通は本矢作に城を構えたが、城域が狭いうえに南方が広い台地と連なっており、その繩張は決して最良のものとは言い難い。

大崎城跡は、北・東・西の三方を湿地帯に囲まれた島状の台地の先端という自然の要害に恵まれた立地の山城であることがわかる。

亂通は本矢作周辺の地頭職であったことから、矢作の觀音大菩薩を信仰していたと伝えられており、これらの台地の良好な条件は後代の国分氏の北方への勢力伸張にとって恰好の基盤となるにふさわしいものであったと考えられる。

2. 大崎城周辺の寺跡と歴史的環境 (I - 2・3 図)

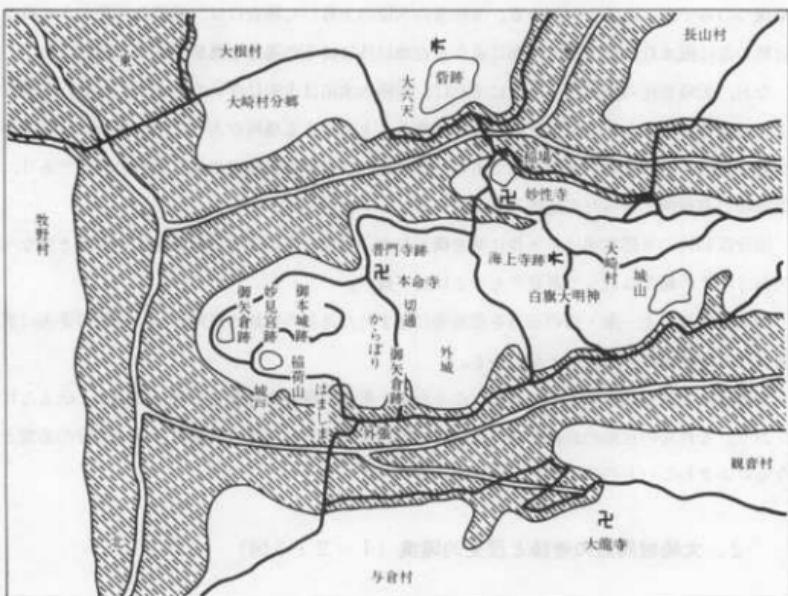
(1) 大崎城周辺の寺跡

大崎城の所在する矢作の集落は、千葉介平常亂の第五子国分亂通にはじまる国分氏の第五代

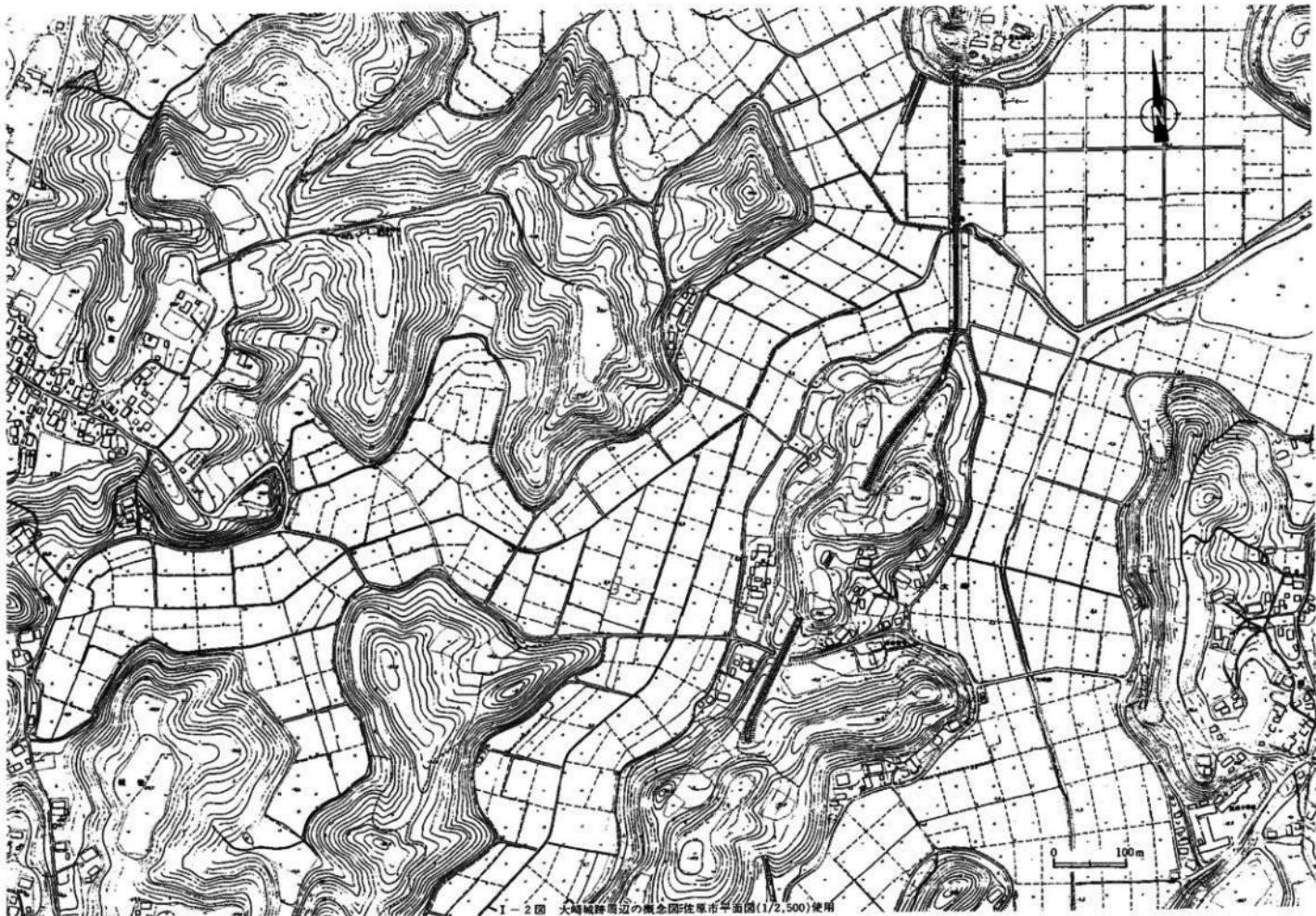
大 市 郡 河 町 史



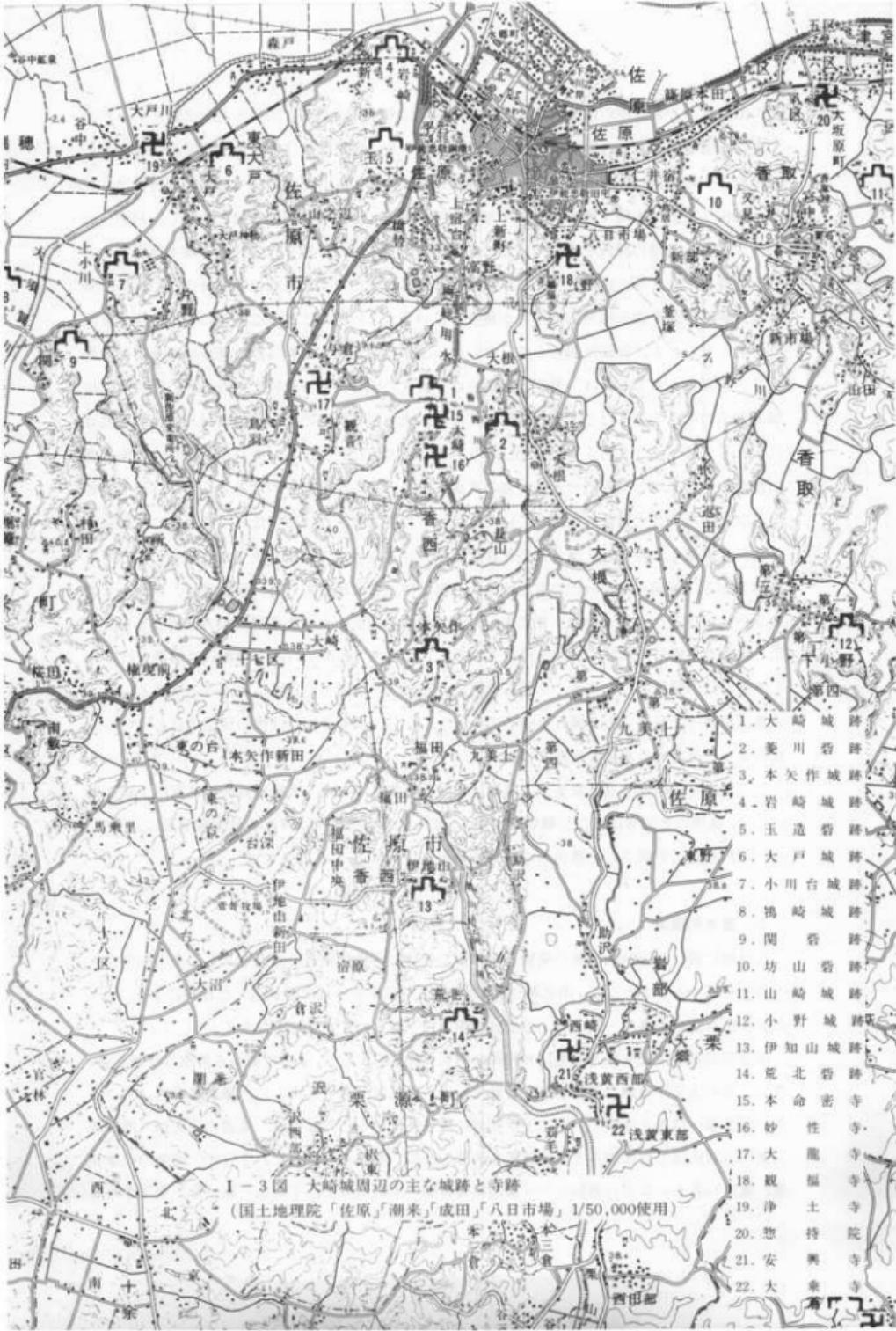
本城正男氏著「臼田七郎右衛門記・矢作古城跡之図」



I - 1 図 絵図解説



I-2 図 大震災被災地の概念図 (1/2,500) 使用



I-3図 大崎城周辺の主な城跡と寺跡
(国土地理院「佐原」「潮来」「成田」「八日市場」1/50,000使用)

1. 大崎城跡
2. 菱川砦跡
3. 本矢作城跡
4. 岩崎城跡
5. 玉造砦跡
6. 大戸城跡
7. 小川台城跡
8. 鴻崎城跡
9. 関谷砦跡
10. 坊山砦跡
11. 山崎城跡
12. 小野城跡
13. 伊知山砦跡
14. 荒北城跡
15. 本命寺跡
16. 妙性寺跡
17. 大觀寺跡
18. 淨悲寺跡
19. 安樂寺跡
20. 大乘寺跡
21. 浅黄西部寺跡
22. 浅黄東部寺跡

彦次郎泰胤のとき矢作の地に城替えをおこなって以来、丘陵の裾に張り付いた曲輪を中心として現在に至るまで人々の生活の場となってきたことが、現地における踏査や絵図から明らかとなった。大崎周辺は、もと足利氏一族の斯波宗家の所領であった大崎庄である。国分氏は本矢作・福田・長田・大崎・觀音・鳥羽・与倉・所・村田・櫛籠・桜田の各村を知行し、村田・大戸・大戸川・松澤の諸氏をその一族として周辺に配していた。国分氏の代々の城主は周辺の寺社を菩提寺として厚く保護している。大崎には真言宗豊山派の大日樹山（国分山）不動院本命寺と、觀音菩薩を崇める福聚山妙性寺が現存しているが、絵図によればこの他にも海上寺と普門寺の名が見られる。詳細は明らかではないが、法華經第25品、即ち『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品』を参考とするならば、普門寺は妙性寺や後代の国分氏の外護による香取郡内の寺院同様臨濟宗系の寺跡であったことも想像に難くない。大戸庄牧野村の真言宗の古刹、妙光山觀福寺に伝わる文書には、貞治4年（1365）閏9月4日参河守花押による『大戸庄まきのふ村地藏堂田地事』をはじめとする国分氏代々他の寄進を中心とする内容のものである。また、国分五郎胤通は矢作の觀音大菩薩を崇拝していたと伝えられておりこれは国分氏代々觀福寺に対し寄進を重ねた実績とも符号し、国分氏の矢作周辺における政治力の拡張を企てた政略の一つとして理解される。觀福寺は国分氏の家臣伊能氏三家と特別な関係であった。伊能家は、景能が大須賀庄伊能村付近に所領を持つ土豪であったが、因幡守朝良が永禄7年国分氏の家臣として里見氏の将正木大膳との戦闘で戦死を遂げている。天正18年（1590）以降の伊能氏は帰農を許されて佐原周辺の開墾に力を注ぎ、三郎右衛門、茂左衛門、権之丞の三家は觀福寺の幢頭として、千葉氏に替って觀福寺との関りを強めていった。なお、觀福寺には後代の伊能忠敬をはじめ一族の傑出した名士の墓跡も所在する。

この他、与倉の妙心寺派寶雲山大龍寺は三河入道寿歎により、大崎の妙性寺は宮内少輔之胤により、瑞穂の光福寺は宮内少輔朝胤により、また大倉山清宝院は寿胤の孫大藏親胤によって、それぞれ創建、中興された臨濟宗の諸寺跡がある。

（2）歴史的環境

大崎城に居した国分氏一族の発展とその後の経緯は、鎌倉幕府の衰退とともにその影を大きく落としてくることとなる。南北朝・戦国期を通して関東を争乱に巻き込んだ世相により、代々の国分氏も他の千葉氏一族とともに混乱の中に引き込まれていくことになる。

国分五郎胤通は父常胤とともに源頼朝の挙兵に参加しており、その功績から奥州に所領を得、さらに参河國矢作の地に所領を加えられている。胤通は父常胤とともに、鎌倉幕府内にあってきわめて厚い待遇を受けていたことが記録に残されている。ところが、胤通の孫矢作六郎次郎左衛門尉常氏は了行法師らと共に謀叛を画策した罪で罰せられている。さらに、頼朝の死後長老、重臣13名からなる合議制という集団指導体制の中にあって、千葉氏一族は全く登用されな

かった。このような事件の背景には、鎌倉幕府内の権力抗争と常胤以後の千葉宗家の家督継承者が相次いで早卒したことが要因となっている。

国分氏六代の胤氏は元弘3年（1333）に、足利高氏父子の挙兵の際、千田太郎胤貞らと共にこれに加わり、国分氏七代の胤詮は建武2年（1335）の尊氏と新田義貞の攻防戦に、足利將軍方として参戦している。応永23年（1416）の上杉禪秀の乱においては、当初千葉氏一族は上杉方として戦闘に参加した模様であるが、後に鎌倉の足利持氏方に参入している。国分氏八代の忠胤は、千葉介胤直父子と共に持氏方として参戦した記録を残している。また、永享10年（1438）の將軍義教の持氏討伐の旨の際、国分民部少輔胤重は千葉介胤直と共にこれに応じている。永享12年（1440）から嘉吉元年（1441）にかけて関東地方を搔かした結城合戦においては、国分氏一族の動きは明らかではないが、千葉介胤将が將軍方として参戦した模様なので、あるいは足利成氏討伐の軍に参加したこととも考えられる。享徳3年（1454）の將軍義政の成氏討伐の旨の際、国分氏十代忠胤は千葉介胤将と共にこれに応じている。康正元年（1455）成氏を支持する馬加康胤・原胤房によって、山内・扇谷の両上杉氏を支持する千葉介胤直・円城寺尚任に対する謀叛がおこされ、千葉宗家は一端系統が絶だることとなる。この際、東下野守常縁は濃州郡上城に居たが、千葉氏の内紛を聞き康胤・胤房討伐の軍を興した。記録にはこの時、千葉介胤直の甥実胤・自胤を助けて国分五郎も出兵したとされているが、これが忠胤であるのか之胤であるのか明らかではない。文明11年（1479）、成氏は太田道灌と和睦したため、千葉氏は孤立することとなった。このような背景のもとで太田道灌は、実胤・自胤の後援を口実に下總国臼井城を攻めることとなった。この際国分氏十一代之胤は、千葉介（馬加方）孝胤とともにこれを防ぐために出兵している。その後、大永年間には後北条氏と里見氏の関東制覇をめぐる争乱に巻き込まれ、武田豊三、真理谷三河守討伐の兵を挙げた。この際には一貫して後北条氏方の立場をとっていたようである。

大崎城の開城には諸説あるが、一つには与倉の大龍寺にある六角石に残された金石文などもあり、また永禄年間に里見氏方の将正木時茂・時忠のために開城したともいわれているが、天正18年（1590）豊臣秀吉の重臣徳川家康の関東制覇に際して他の千葉氏一族の城と同様に、さして戦うことなく開城したことが伝えられている。

近世に入ってからの大崎城は、徳川家康の家臣島居彦右衛門元忠が城主として4万石を知行したが、城内が手狭なせいもあり近くの岩崎に新に城を構えることとなつたが、慶長5年（1600）城の完成を待たずして城主元忠は伏見城において上総佐貫城主内藤弥次吉衛家長、下総小見川城主松平主殿頭家忠と共に、石田三成ら西国の諸将を中心とする大坂方の攻撃を受け籠城、戦死を遂げている。大崎城は元忠の第二子左京亮忠政が遺領を繼いだが、6万石を加増せられて陸奥磐城に国替となって以後は廢城となつたようである。

参考資料

1. 本城正男氏藏「臼田七郎右衛門記・矢作古城跡之図」(弘化3)
2. 観福寺文書「貞治4年閏9月4日大戸庄まきの、小村地蔵堂田地事」「応永2年3月22日地蔵堂免事」「応仁3年己丑1月吉日国分之亂・下總之国大戸之庄牧野村観福寺鎮守天神御神田」「文明3年かのとのう国分之亂・まきの、まつしのはうの事(牧野の辻坊之事)……(以下略)」「永正11年甲戌3月21日国分亂盛・奉寄進下總国香取郡大戸庄内関戸之村五殿観福寺」「天文16年丁未2月5日国分朝亂・牧野観福寺為住持自性院神尊へ差渡申候……(以下略)」「天文18年己酉12月27日国分朝亂・奉観福寺寄附事」
改訂房叢書
3. 舊大輔宜家文書「承久3年3月17日鎌倉幕府下知状寫」「文明3年7月吉日国分之亂安堵状」「文明4年正月吉日国分之亂安堵状」「文明19年閏11月23日国分亂盛安堵状」「明応9年4月19日国分亂盛安堵状」「永正4年9月11日国分亂盛安堵状」「大永8年7月27日国分亂相寄進状」「天文14年8月26日国分朝亂等寄進状」「天文18年10月吉日国分勝盛安堵状(小野村内江戸山之事)」「(香取彈正前庶子分之事)」「天文22年3月10日国分亂藝起請文」
千葉縣史料 中世篇 香取文書

3. 大崎城跡の概観と構造(I-4図)

(1) 城跡の概観

城跡は、北・西・東の三方を谷津に囲まれており、偏狭な台地の北端に位置し、この台地を東西に走る数本の空堀によって南への防禦としている。北端は、左右の高台を残すものの北方への意識は明瞭なものではない。なお、絵図によれば、この2つの高台は、東側のものが矢倉、西側のものは稻荷山となっており、この山の外側に城戸の名が見られることと合わせて、この

付近が本城への出入口であったと考えられる。

本城の所在する内郭は、西側に小さな曲輪を数段配置し、最も高い平坦な部分を矢倉としている。また、東側には現在『妙見畠』と呼ばれる平坦地があり、絵図にも妙見宮跡とあるところから千葉氏の守護神である妙見社が祭られていたものと考えられる。

両総用水の工事に際して、本城と矢倉の中央一段低いところで井戸が確認されたとのことであり、このあたりが井戸郭と考えられる。

本城を含むこの内郭は、周囲を切り立った崖によって断ち切られている。井戸郭のすぐ南は、規模の大きな空濠と切通があり、これより南にある他の施設とは遮断された形となっている。

切通に沿ったのは中央部に土壘をめぐらした平坦な曲輪があり、この曲輪の西側は断崖となるが、腰部に相当する戸張の集落との間の高さに、幅15m程の平坦地が確認された。この平坦地は、現在両総用水の送水管の通る切通にかかるトンネルへと続いている。

城跡のほぼ中央部には真言宗豊山派本命寺があり、このわきを東西に走る切通に面して南に外城と呼ばれる平坦部がある。この西側にはかって土壘のあったことが観察されるが、送水管敷設工事の際に一部削平されたものと思われる。

この土壘は、一端南へ丘陵頂上に向って伸びたあと尾根を横断して崖沿いに北上する様子が絵図によても理解される。この土壘に沿って急な坂道を下ると本命寺の裏を通り東へ張り出した台地の先端付近に出る。

絵図によればこのすぐ上の平坦な場所に普門寺跡との記載がある。

本命寺裏山の土壘より南は、比高差10m以上はあると思われる大きな切通しが東西に走り、ここでも台地を切断する形となっている。

また、これより5m程南には道があり、この道も深く掘り下げられた空濠様を程して台地を切断することになる。なお、この道は絵図にすでに記載されており、かなり古い時期のものであることがわかる。

これより南の台地には、比較的大きな平坦地が段々畠様に連なり、白旗神社の裏山まで続くことになる。最も南の端に位置する曲輪には、南側のみ土壘がめぐり、その南及び東に沿って幅3~10m、深さ3~5m程の空濠がL字形に配されている。この空濠が城跡の最南端にあたるものと思われる。なお、この空濠を越えた一段低く削平されたところに源氏縁の白旗神社の社があり、正確にはこのあたりも城跡の範囲に含めるべきかと思われる。

また、大崎村から大根村へとぬける道が本城跡にとってかなりの重要な鍵を握っていたことがわかる。すなわち、絵図によれば、本城跡から東南方向に所在するもう一つの半島状の台地の先端近くに妙性寺があり、この東側に船場と呼ばれる高台がある。

道はこのわきをぬけてから谷津を渡り、対岸の大根村へと至る。対岸に上るとすぐに砦跡と記された高台があり、この道に対する意識の強さがうかがわれる。

城跡の西の縁沿いの道を南下すると、まもなく城山と記された高台に至る。これは南方に対する防禦を意識した施設と考えられる。

大崎城の場合、大根村は多古方面から香取神社へ至る要路にあたり、北上する敵対勢力を牽制する姿勢が充分に読み取れる構張りということができる。これに比べて北方の牧野村・高野村・与倉村・観音村に対する警戒度の低さはきわめて対照的なものとなっている。

(2) 城跡の構造

第一郭

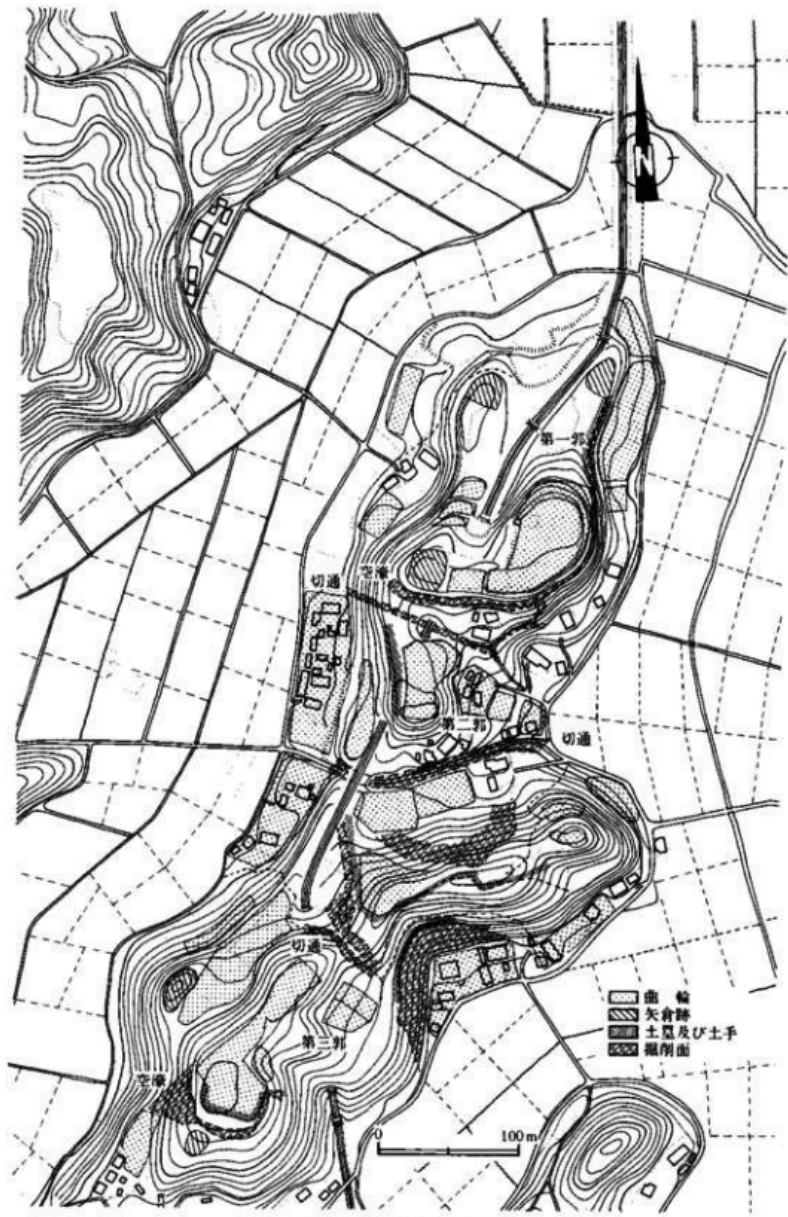
最も北の端に位置する郭で、南の台地とは切通と空濠によって分断されている。第一郭には、大崎城の最も中核的な御本城の所在した部分である。北方の水田面から段を追うごとに除々に高まりを見せ、現在両総用水の通っている部分に古道があったことが知られており、西側の比較的小さな3つの曲輪はその規模を減じていることも考えられる。絵図による北端の稻荷山と御矢倉跡は、本来小高い丘陵状の台地の先端部分を残して削平したものと考えられる。西側の稻荷山も付近の城戸という旧地名から推測すれば、物見の機能をもった高台であると考えられる。東側の最も高くて広い平坦面が御本城となる。今回の発掘調査はこの付近に発掘区を設定した。北端の矢倉跡から本城跡を結んで土塁が走っている。第一郭の南の空濠は、深さが5~6m、幅も3~4mと規模の大きなもので民家の敷地によりその一部は現存しないものの、第一郭を包みこむように西側「外張」の曲輪へとゆるやかに弧を描いている。その外側に幅3~5m程の切通が台地を切断しているこれより本命密寺の裏山を含み、再び2本の切通によって台地が分断されるところまでを第二郭とする。

第二郭

第二郭は中央に幅の広い切通をはさみ、北側には数ヶ所の小さな曲輪が点在し、第一郭との境となった切通に面してほぼ中央に南北50m、東西25m程の曲輪がある。周囲に土塁状の土手がめぐるが、自然の地形を耕作を目的として削平した名残とも考えられるが、西側の土手は高さもあり、単に耕作のために山を削平して残された部分とも考え難い。中央の切通の南に面する字外城の曲輪は東西に長い形状をしており、両総用水の送水管付近には土塁が残っているが、用水工事の際に若干削平された模様である。この土塁は、本命密寺裏の丘陵上の出郭へと連なっている。

出郭は現在山林となっており、詳細は明らかではないが本命密寺側から急な山道を登りつめると南北の斜面が切崩されており、土塁状の土手が東西方向に尾根沿いに走っていることが確認された。すなわち字外城の西側の土塁は、斜面を登った後出郭の周囲を迂回してこの土塁状の土手に連なるものと推測される。

出郭の南東には切通のある中段に小規模の土塁があり、これより下の曲輪には海上寺、また



I - 4 図 大崎城跡拡張概念図

本命密寺の裏山の中程には絵図によれば普門寺との寺名があり、山道沿いの平坦な曲輪状の一画がこれに該当するものと考えられる。出郭の南には幅の広い切通が存在し、高さ2~3m程の島状の土手をへだててさらにもう一本の切通が並行して走っている。これより南を第三郭とする。

第三郭

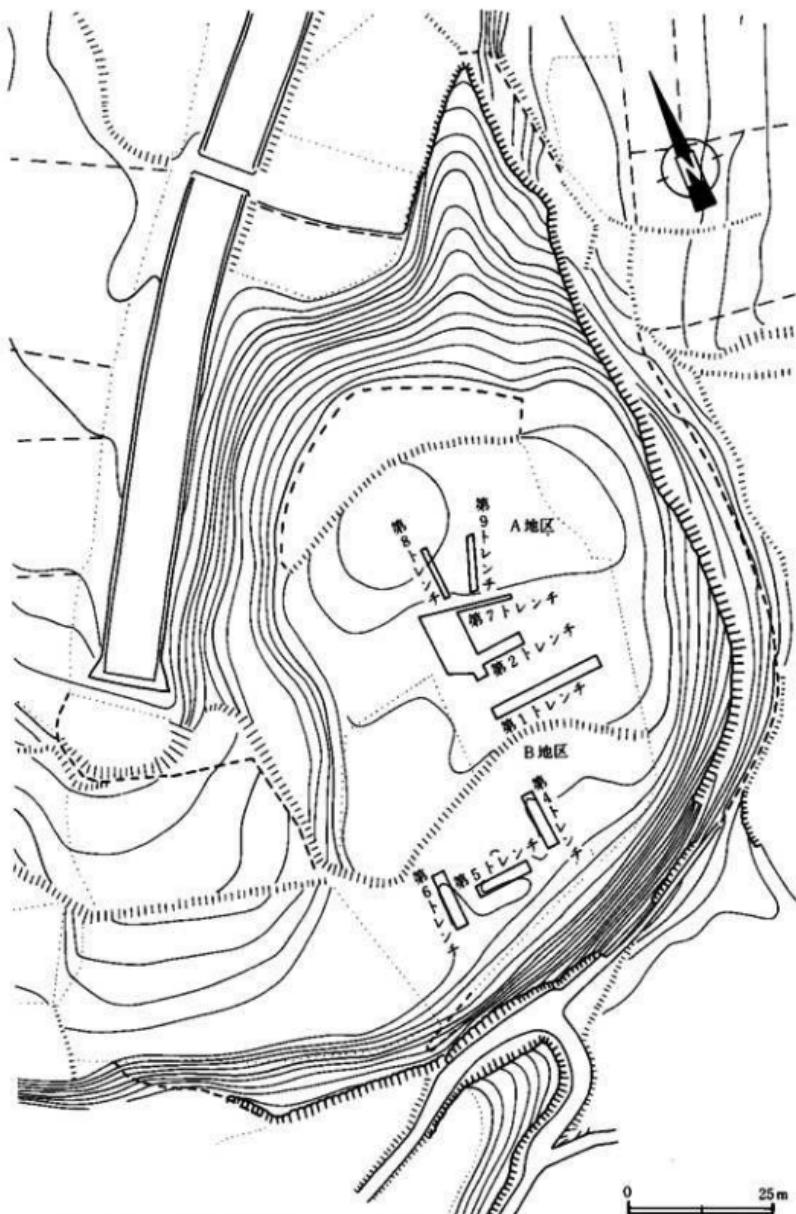
第三郭は南北に長い2つの曲輪が中央に位置し、東側には比較的小さな曲輪が斜面を削平して造られており、西側には長さ200m、幅40m程の長大な曲輪が配されている。さらに西側には一段下った所に幅のせまくやや長めの曲輪が確認されたが規模は明らかでない。長大な曲輪の西南の一角に小高い丘が残されている。頂上は平坦面となっており、櫓としての機能をはたしていたものと考えられる。また、中央の曲輪のうち最も南に位置するものは、その南辺にそって土塁が巡る。この土塁の外は幅の広い空濠がL字状に曲輪を囲んでいる。空濠の南にはわずかに小高く突き出た平坦面があり、これも櫓としての機能をもっていたものと考えられる。これより南は急斜面となっており、中腹には源氏縁りの白旗神社がある。なお、白旗神社の階段を下りきったところに切通状の東西に走る道筋がある。現在道路の拡張整備の為、道路の南側は大きく変更されてしまい推測の域を出ないが、絵図にも古道が記載されており切通であった可能性がつよい。

4. 発掘調査と概要 (I - 5 · 6 · 7 · 8 図)

(1) 調査方法と経過

発掘調査は、昭和59年10月22日から10月29日までの8日間にわたり、金子宗一郎氏所有のかつて『妙見畠』と呼ばれたタバコ畠を中心に約200mにわたり実施した。

- 10月22日 調査区域の環境整備作業とトレンチの設定作業。
調査区域の現状の写真撮影。
- 10月23日 A地区第1~第2トレンチの発掘調査。
遺構検出作業。
- 10月24日 A地区第3トレンチ及び、第2トレンチとの交差地点の一部拡張。
B地区第4トレンチ発掘調査。
- 10月25日 A地区各トレンチ土層の観察。拡張部分の精査。同地区に第7~第9トレンチを設定し発掘調査を実施する。
B地区第4~第6トレンチ発掘調査。
- 10月26日 B地区第4~第6トレンチ発掘調査。
- 10月27日 A地区拡張部分の遺構精査。第1~第3トレンチ検出遺構の実測。



I - 5図 大崎城跡発掘調査トレンチ配置図

- B地区第4～第6トレンチ土層の観察。検出遺構の実測。
- 10月28日 A地区第1～第3トレンチ埋めもどし作業。
- B地区第4～第6トレンチ土層観察面の実測と撮影。
- 午後2時より現地説明会を実施。
- 10月29日 B地区第4～第6トレンチ埋めもどし作業。

機材撤収

本城正男氏所蔵の矢作古城の絵図によれば、最も小高い平坦面には千葉氏の守護神を祭る妙見社のあったことが記されている。今回の調査では、妙見社のあったと考えられるA地区と、一段低く南に隣接する曲輪にあたるB地区を中心にトレンチによる観察をおこなった。

A地区

第1～第3トレンチのいずれも耕作土は浅く、10～15cm程で暗褐色土層となる。暗褐色土層は、近世を中心とする遺物の包含層となっている。この暗褐色土層も20cm前後の厚味であり、遺構の検出面はいずれもソフトローム層上面である。

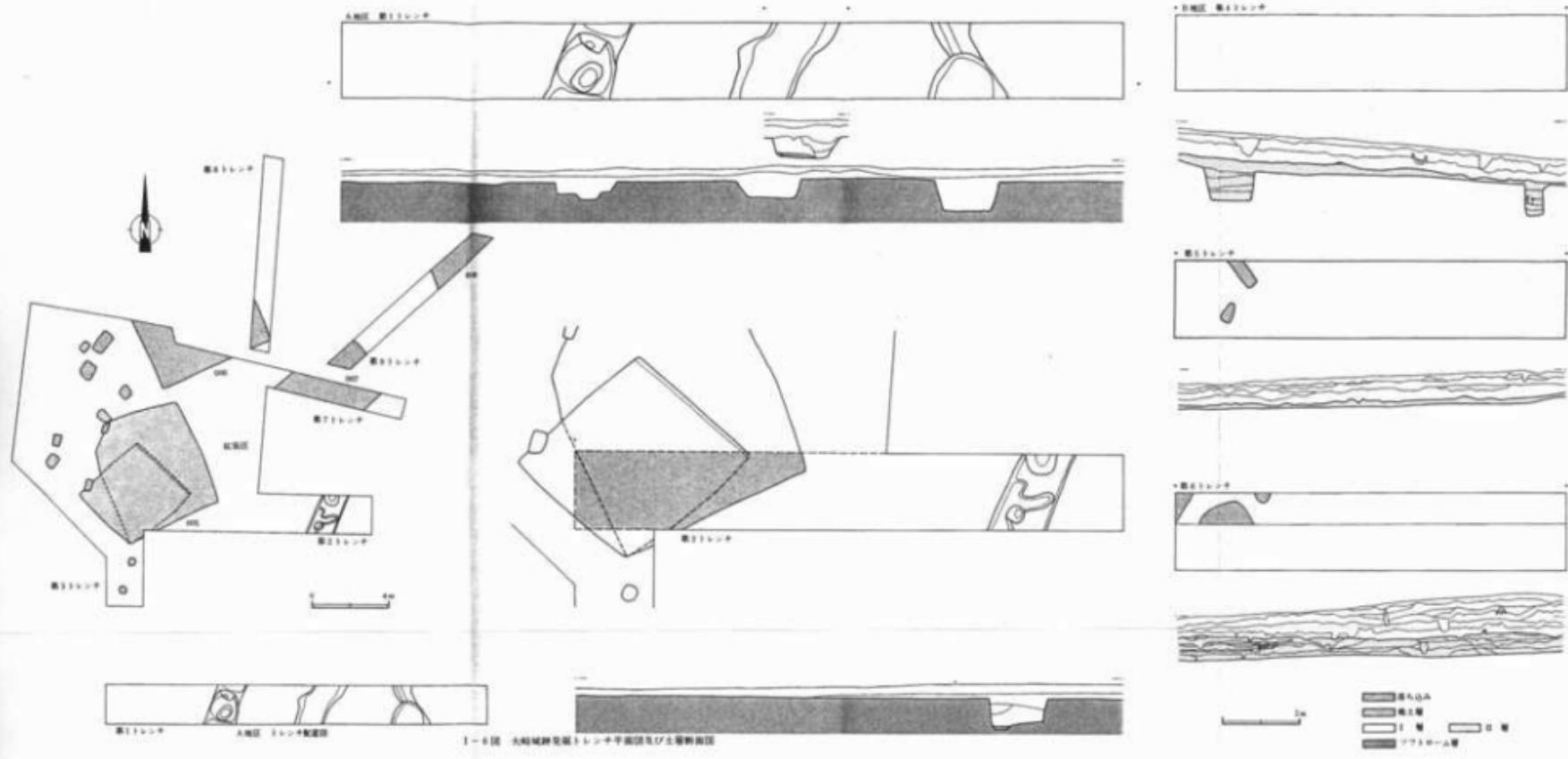
第1トレンチ内には、3条の溝が南北に走っており性格は不明ながら中～近世の遺物を含んでいる。また、中央の溝(002)の土層観察に代表されるように、覆土の最下層にはいずれも焼土の堆積がみられる。

第2トレンチは第1トレンチに並行する設定となっている。第1トレンチ同様南北に走る溝が確認されている。この溝の土層の観察によっても覆土最下層には焼土の堆積がみられた。したがって、これらの溝の性格の特徴の一つとしてえることができる。絵図によれば、このあたりが『御本城跡』とあり、その北側の『妙見宮跡』とならんで大崎城跡の最も主要な地域であることから、あるいは、これらに間連のある性格の遺構としての可能性を考慮しなければならない。

第3トレンチは第2トレンチに直交して設置されている。第2トレンチと交差する位置に不定形の遺構面を検出したため、拡張してその性格の把握につとめたが、複数の遺構が切り合っている状況であった。一つにはその出土の遺物から古墳時代五領期の住居跡であるが、これを切り込む形で重複している他の一つの遺構の性格については、今回の調査では明らかにすることはできなかった。また、A地区北側の篠林に設定した補助トレンチにも006、007の方形プランをもつ2つの遺構が確認されている。これらの遺構の性格についても平面プランを確認したにとどまるため、時期等についても明らかにはできなかった。いずれも、覆土は20～30cm程と比較的浅く、同じ方位で並ぶことから、005を切る遺構と相互に繋りをもつ可能性もある。

第7第8及び第9トレンチは、拡張区において方形の落ち込みが検出されたため限界を確認するため急掘、地主の金子力造氏の承諾を得て調査を実施した。

005とはほぼ同様な方形プランをもつ006、007が相次いで確認された。また、第9トレンチ内に



1-6図 大蛇城跡発掘トレンチ平面図及び土質物語図

も引きつづき遺構の続くことが確認されたが、いずれも時期の断定には至らなかった。

B地区

第4トレンチは南北方向に設定されている。遺構は確認されなかつたが、土層の観察によれば黒褐色耕作土層及びロームを含む暗褐色土層からなるI層と、山砂を含む暗褐色土層及び灰茶褐色土層を中心とするII層とに大別される。I層中には木炭粒がみられ二次的な堆積の可能性が強い。

第5トレンチは東西方向に設定されている。トレンチ西端付近には柱穴状の落ち込みと狭長く北壁から突き出た長方形の落ち込みが確認された。第5トレンチの土層の観察によれば、黒褐色耕作土層及びローム粒子・木炭粒を含む暗褐色土層からなるI層と、山砂を多量に含む暗茶褐色土層を中心とするII層とが確認された。

第6トレンチは第4トレンチと並行して設置されている。第6トレンチ南端付近には3ヶ所の落ち込みが確認された。これは、第5トレンチ南端と至近距離にあり、郭に関する遺構の可能性もあるが、確認部分からのみの断定は困難である。また、土層の観察によれば黒褐色の耕作土層及び暗褐色土層、茶褐色土層を中心とするI層と、灰白色粘土質の土層を含む黄褐色の山砂土層を主体とするII層に大別される。

B地区の第4～第6トレンチのいずれもI層中には木炭粒を混入し、II層に山砂の量が多くなり、あわせてA地区の耕作土以下の土層の薄さを考えるならば、A地区で削平された土壤をB地区に盛土して嵩上げによる造成を施したものと考えられる。この造成が郭を設定した時ものであるのかまたはそれ以後の耕作によるものか断定する根拠には欠けるものの、A地区に比べてB地区の場合にはトレンチのI層の割合下部から陶磁器が出土しており、遺物の年代を考える中でさらに考察を加えることとした。

(2) 出土遺物

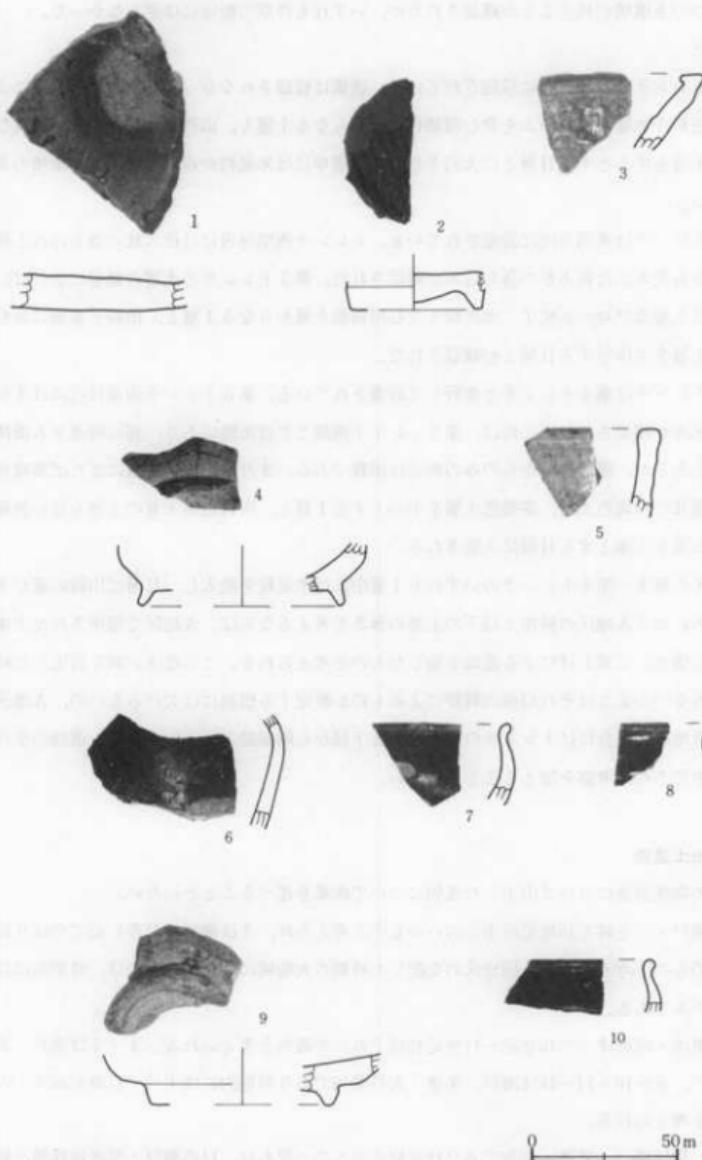
今回の発掘調査において出土した遺物について成果を述べることとした。

1は瀬戸・三足鉢で15世紀前半くらいのものと考えられ、3は瀬戸・おろし皿でやはり15世紀前半のものと考えられる。国分氏の支配した時期の大崎城に関係するものは、時期的にはこの2点のみである。

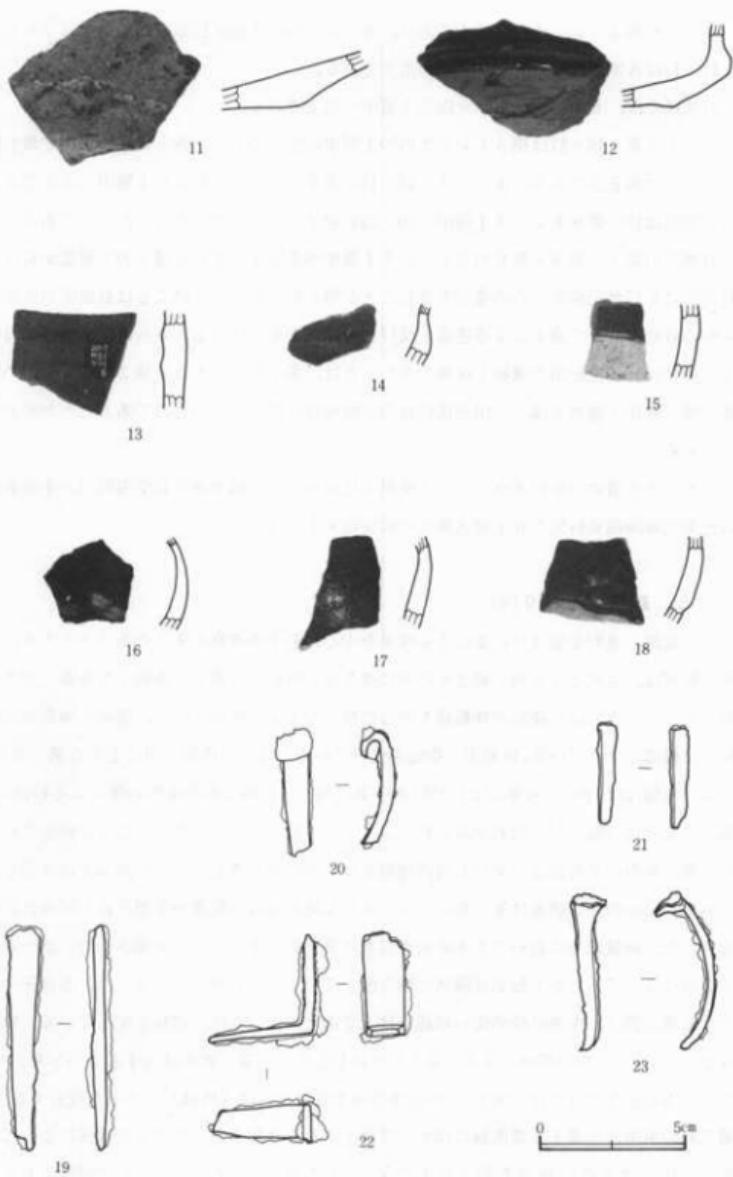
2は唐津・絵唐津塙で16世紀～17世紀初頭くらいが適当と考えられる。4・5は瀬戸・志野線香立て、6～10・14～18は瀬戸、美濃・天目茶碗であり時期的にはすべて17世紀前半くらいのものと考えられる。

また、12は瀬戸、美濃・香炉であり18世紀代のものと思われ、11の瀬戸・型紙鉄絵瀬戸鉢及び13の瀬戸・鉢はいずれも19世紀代のものと思われる。

3はA地区における耕作土中の一括品であり、遺構に伴うものではない。



I - 7 図 大崎城跡出土遺物(1/2)



1-8図 大崎城跡出土遺物(1/2)

4・5が第1トレンチ内の出土であり、9・13・14がA地区拡張区内の出土品である。

11・12はA地区の第3トレンチ内の出土である。

B地区では、6が第4トレンチ内のI層中の出土である。

2・7・8・16・17は第5トレンチ内のI層中の出土であり、各トレンチの中で最も陶磁器を出土した調査区である。また、1・15・18は第6トレンチのやはりI層中の出土である。

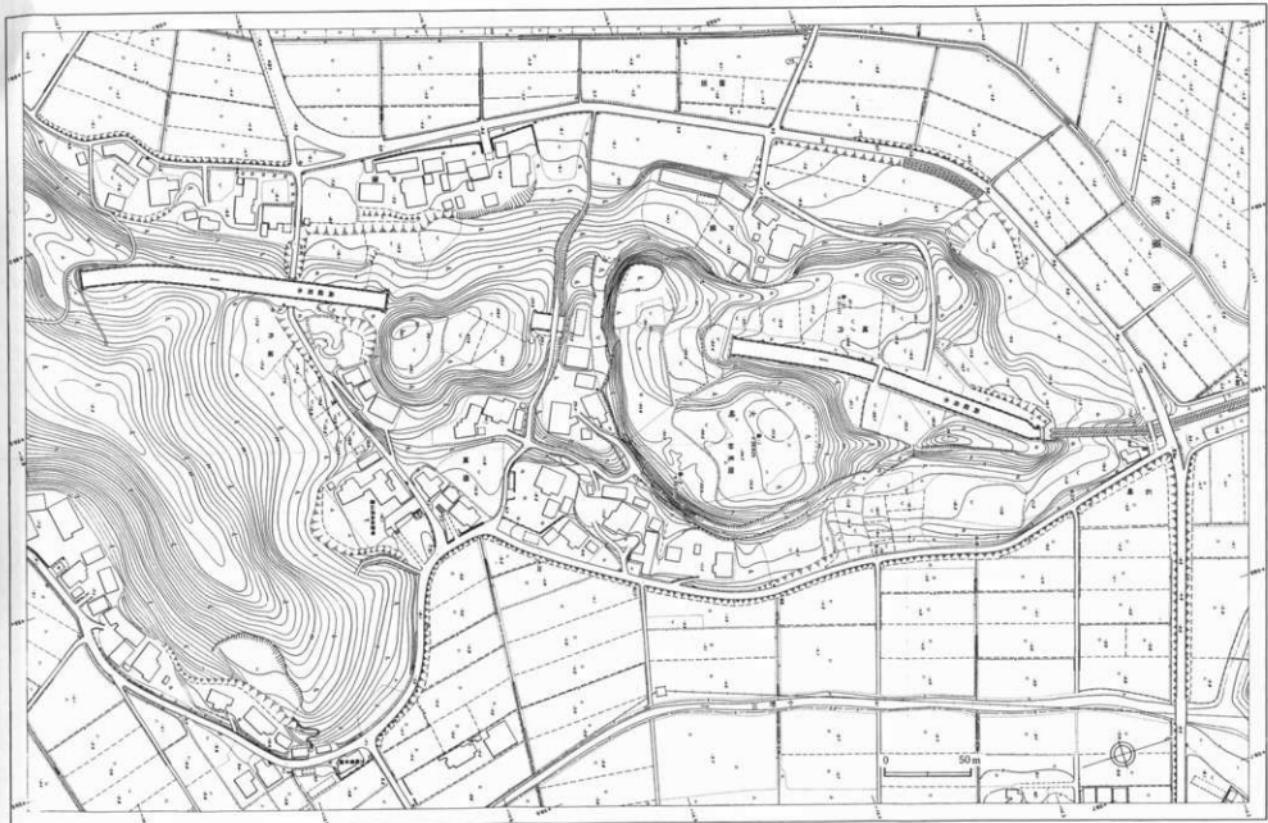
鉄製品は19が第6トレンチI層中、20~23が第2トレンチ内のそれぞれ出土である。

B地区の第4・第5・第6の各トレンチI層中の遺物がいずれも覆土の下層部から出土し、時期的にも17世紀前半ころの遺物を含むことが明らかとなり、このことはB地区が近世以降何らかの目的をもって盛土による造成を受けた可能性を示している。さらに、A地区において耕作土中に18~19世紀頃の遺物を採集できたことは、第1トレンチ及び第2トレンチ内の溝状構造を覆う耕作土層の主体が、国分氏以後の大崎城跡に関する人々のものであることが推測されるのである。

なお、出土遺物の年代考察には、千葉県文化財センター調査研究員柴田龍司・小高春雄両氏の他愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏の鑑定結果を参考とした。

5. 結語（I-9図）

大崎城跡の地形測量及び踏査による成果を中心に若干の考察をまとめることとする。大崎城跡の輪郭は、主郭となる第一郭とその南に連なる丘陵部に位置する外郭となる第二郭及び第三郭からなる。内郭は丘陵部の外輪線を中心に残したまま、内側を削平、造成し梯郭状の曲輪を配した構造となっている。佐原市の指定を受けているのはこの内郭を中心とする第一郭である。主郭の東側には『作』、西側には『戸張』の字名が残り、白田七郎右衛門の筆による絵図には『外張』の北方に『城戸』の地名がみられる。ここが主郭への入口であったことが推定される。また、第一郭内の矢倉跡はいずれも自然地形をたくみに削り残して小高い高台を造り出したものである。今回の発掘調査は第一郭のうち、主要な城郭施設の配置の予想された区域において実施された。測量調査においても本命密寺以北の第一郭を中心として実施されたことから、空堀と切通によってあたかも独立丘陵状に構を配していることが明らかとなった。本命密寺を中心とする第二郭は、中央に幅の広い切通を狭んで南北両面に数段の曲輪を配している。家臣団のみならず、城主一族の平時の生活の場としてはむしろこの第二郭が該当するものと考えられる。なお、本命密寺付近には『城畠』、両総用水送水管付近には『外城』の字名が現存する。また、第二郭の東南に位置する腰曲輪にはかつて海上寺なる寺跡のあったことが絵図によって知られるが、現在は大崎区長高木和夫氏宅となっており周辺の字名『ヘリメ』の語源ともども明らかでない。第二郭の『外城』以南については踏査の結果大崎城の城域として含むべき領域であることが明らかとなった区域であり、測量調査は全域にわたり実施することはできなかった。



I-9図 大肚城跡地形測量図(1/2,000)

本命密寺の裏山に位置する出樹状の曲輪とその南に位置する2筋の切通は、あたかも武者屯的な性格をも持ち合わせていた可能性も考えられる。第三郭の最も南に位置する曲輪は、主郭に配置されたいずれの曲輪よりも規模が大きく、第一郭・第二郭における曲輪の様子とやや異ったおもむきがある。大崎城の規模としては、さらに南の白旗神社の切通状の道までの南北約800m、東西約300m程が城域として把握することができる。

大崎城の年代

大崎城は国分氏五代の彦次郎泰胤の時に、国分氏初代の五郎胤通の築城した本矢作から移ったとされるので、鎌倉時代末期とされるが正確な築城時期は明らかでない。その後、国分氏は右馬助盛胤が奥州に領地を得て胤通以来の奥州国分氏を繼ぐことになる。(胤通は奥州に領地を得たものの本矢作の地頭職として下総国に留まっていた。)

代々大崎城を継いだ国分氏は鎌倉幕府の崩壊と南北朝時代の混乱期を迎える。同族である千葉氏とともに時代に翻弄され數奇な運命をたどることとなる。出土遺物の中にこの時期の遺物はごくわずかであるが、15世紀前半とおもわれる瀬戸の三足鉢とおろし皿が出土している。遺物の中心はむしろ近世・江戸時代前半にあり、結論的には大崎城跡と直接の結び付きをもつ遺物は検出できなかったと言わざるを得ない。中世城郭の本城は、日常の生活の場とは異っていることなどから考えても、今回の調査において時期決定の可能な遺物を検出できなかったのはむしろ当然であるかも知れない。したがって、大崎城の年代は文献その他周辺の寺院跡に残る資料等からすれば、15世紀頃から17世紀の前半までとするのが一つの考え方であるかと思われる。

最後に、今回の調査に際し大変御尽力いただいた佐原市教育委員会社会教育課と現地の調査及び資料調査に御協力いただいた次の方々には記して心から感謝したい。

本城正男・根本みち・根本弘・高橋賢一・森本和男・高木和夫・金子宗一郎・金子権之介・金子力造・鈴木とよ・飯島とし・稻葉ユリ子・鈴木いく・小倉千代・飯高みち・有田ひさ江・小倉信子・石橋千恵子・金子みち・齊藤直子・白田もと・秋山みね・堀越ゆき

参考文献

1. 大多和晃紀「関東百城」(昭・52)
2. 改訂房總叢書 第五輯 「千葉大系図」・「松葉館本千葉系図」・「神代本千葉系図」
3. 「香取郡誌」
4. 「佐原市史」 佐原市教育委員会編 (昭・41)
5. 紫辻俊一 「後北条氏の両總支配」論集房總史研究 (昭・57)
6. 千葉県郷土史研究連絡協議会編 (昭・52)
7. 日本城郭大系6 千葉・神奈川・城郭解説
8. 長谷川匡俊「中世仏教と千葉氏」「千葉氏の信仰」論集千葉氏研究の諸問題
9. 長谷川匡俊「佐原觀福寺と伊能氏」論集房總史研究 (昭・57)
10. 府馬 清「房總の古城址めぐり・下・下総国」(昭・52)

写 真 図 版



空から見た大崎城（縮尺 約1/13,000）

写真提供 株式会社京葉測量（昭和43年撮影）



大崎城跡遠景(北から)



同上(東から)



同上(西から)



A 地区調査前風景



A 地区第 1 トレンチ



A 地区第 2 トレンチ



第1トレンチ内溝



拡張区の重複遺構



A地区調査風景



B地区調査前風景



B地区第4トレンチ



B地区第5トレンチ



B地区 第6トレンチ



第一郭東側腰曲輪近景

第一郭内から見た牧野方面



同上 遠景

第一郭内東側土塁





第一郭内西侧曲輪



第一郭内西南矢倉跡



第一郭周辺空濠(南側)



同 左(東側)



空濠南側の切通



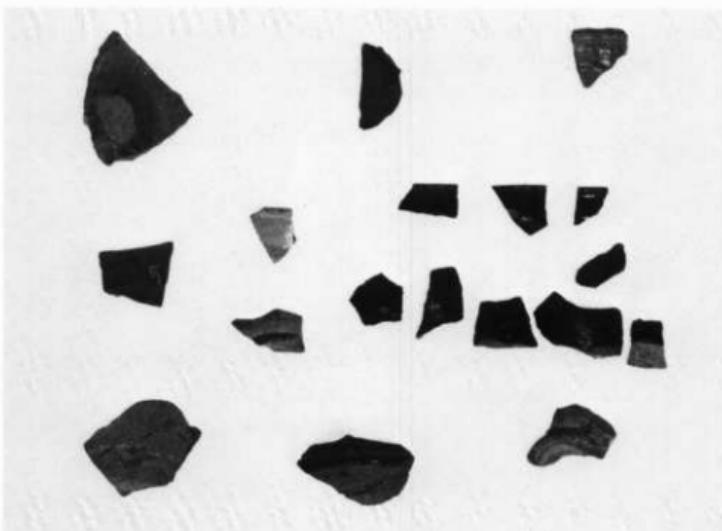
白旗神社南側の古道



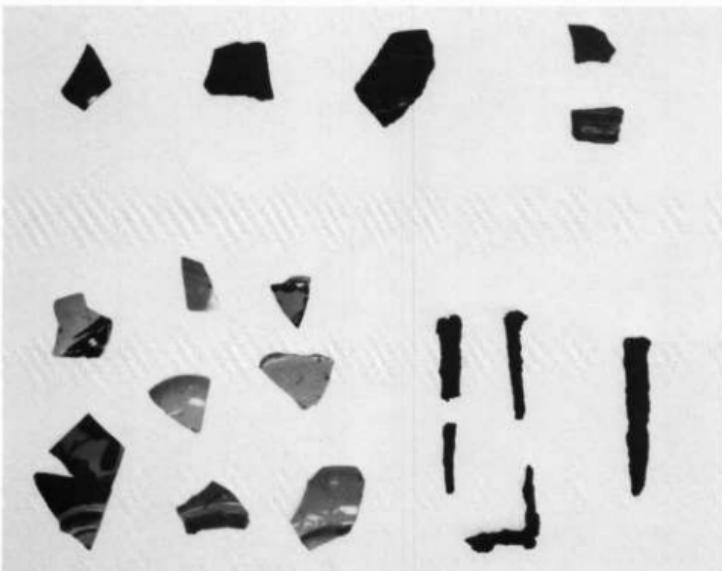
白旗神社境内



国分氏一族の慰靈碑

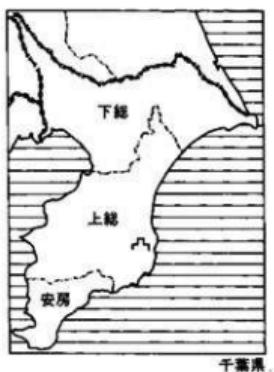


上 15世紀前半～17世紀初頭 中・下 17世紀前半～19世紀前半



時期不詳 陶磁器・鉄製品

II 夷隅町万喜城跡



II 夷隅町万喜城跡

1. 万喜城跡の位置と地理的環境 (II-1図)

万喜城跡^(注1)は、夷隅郡夷隅町大字万木字城山に所在している。国鉄木原線国吉駅の北東約2km程のところにある。

地形的には房総半島の東南部にあたるこの地域は、標高60m～150mの山地が連なっている。この山地は全体に急崖な斜面が続き頂部も平坦部は少ない。この山地の間をぬって房総半島の南部に横たわる清澄山系を源とする夷隅川が、いくつもの曲流をくり返しながら西から東へ流れ太平洋へと注いでいる。

夷隅川の曲流は、山塊との間に標高12～20mの河谷平野を生み、流域の大多喜町、夷隅町、岬町では肥沃な水田地帯を形成している。

城跡は、この低地へ南から北へと突き出した山塊の北側に占地しており、標高30m～68mと南へいくにしたがい高くなる自然地形を巧みに利用している。また、曲流蛇行する夷隅川が城跡の西、北、東の三方をとり囲んでおり、幅60m前後のこの川が城の外濠としての役割を果している。城跡の裾部と夷隅川との距離は西側で最も広く600m前後、北東側で最も狭く200m程度である。また、夷隅川を挟んだ対岸一帯も2km～3kmの幅広い水田地帯で、城跡からは一望のもとに見渡すことができる。夷隅川は南西側～南の国吉方面あたりで城跡から続く山塊に近接しており、この地点で南から流れ込む小河川の落合川と合流している。

城跡の南側は幅の狭い尾根が続く山塊であるが、高低差のある地形となっている。この山塊の最高標高は、城跡のわずかに南側の地点で85.6mを測る。山塊の東側と西側は幅の狭い谷が數多く入り込み、複雑な地形となっている。

このように万喜城跡の周辺は、城の立地においてこのうえない地形を呈しており、また城の構造そのものがこの地形を巧みに取り入れているようである。

注1 万木城、万騎城、満喜城ともいわれ「まんき」と読む。本書では万喜城として統一した。

2. 万喜城跡周辺の城跡と歴史的環境

(1) 戦国時代以前の夷隅

万喜城跡の所在する夷隅町の地域は、旧上総国に属しており、「延喜式」(927年成立)によれば、市原、海上など11の郡の中で夷瀬（いしみ）としてその名がみえるところである。大宝1



第II-1図 万喜城跡と周辺の主な城跡・寺院 (国土地理院「上総大原」 1/50,000使用)

年(701)大宝律令で示された、国一都一里制の導入によって設置されたもので、それ以前の4世紀末から7世紀においては、大和政権の成立のもとに編成された国造といわれる、古代豪族の領域となっていた。『日本書紀』の『安閑紀』には伊勢国造、伊勢屯倉の名がみえ、この伊勢が夷隅地域にあたるとされている。また万喜城跡の南西、国吉駅の付近には国府台と呼ばれるところがあり、その地名から、この付近に郡衛が存在していたと推定されている。

8世紀末～9世紀代になると、大宝律令に示された律令体制は、農業を基盤とする生産性の向上、それに伴う大土地の私有化といった状況を生みだしにその効力を失ってくるようになる。この大土地の私有化は、社寺や有力な貴族によって進められ、初期の荘園（墨田地系荘園）を形成していく。こうした荘園は9世紀末から11世紀代、藤原氏が政治的実権を掌握する過程において、その保護を受けようとする在地の田堵、名主と呼ばれる所有者によって寄進され、寄進地系荘園へと変化していく。そしてこの田堵、名主もしだいに力を蓄え在地の私営田領主となり、平将門・平忠常といった地域の豪族を生み、935年～936年の承平・天慶の乱、長元元年（1028）～長元4年（1031）の平忠常の乱へと発展していく。

平忠常の乱は、上総をはじめとする房総の地を荒廃させていったが、この復興の過程にその子孫が上総氏・千葉氏などに別れ、中世の武士国へと成長していくのである。

『吾妻鏡』（治承4年（1180）から文永3年（1266）に至る、鎌倉幕府の事績をしるした史書）によると、上総国伊隅荘が、鳥羽上皇の創建した金剛心院の荘園であることが記されており、平安時代末には、すでに荘園が成立していたことが知られている。その後、伊北荘、伊南荘、千町荘の三つの荘園に分割されていくことになる。夷隅町国府台から、大原町新田野にかけて「イナンダイ」と呼ばれる地域があり、現在の国吉駅付近から国府台、万木にかけての地域は、伊南荘の一部に含まれていたと考えられている。

平安時代末期から鎌倉時代初期においては、先の忠常の流れをくむ上総權介平広常が国司として、下総の千葉氏とならんで勢力を持つようになった。大原町布施の藪台付近は、広常の居館と伝承されている。權介広常は、源頼朝の鎌倉幕府樹立（1192）の過程で影響を及ぼしたといわれているが、寿永2年（1183）この頼朝により命を断たれ、上総氏は解体していく。

また、この広常の一族に伊北氏が存在していた。伊北氏は平安時代末から鎌倉時代にかけて、この夷隅地域に力を持っていた「開発領主」の一人であり、その名の示すとおり伊北、伊南、千町の三荘を基盤としていたと考えられる。この伊北氏は鎌倉時代を通じて後家人として活躍していたが、南北朝時代（14世紀）に入ると没落していくようである。万喜城の北、岬町岩熊には、この伊北氏の居館の一つと考えられている岩熊城が存在している。

また、權介平広常の没後には、伊北荘は鎌倉幕府の侍所の長官となった和田義盛が、一時領していたことが『吾妻鏡』によって知られている。

南北朝の動乱を経て室町時代になると、関東管領大懸上杉家が上総国の守護となり、この夷隅地域は鎌倉府の直轄領が置かれ、二階堂氏、畠山氏、狩野氏などがこの管理にあたることになる。しかし、橋口定志氏は『岬町史』の中で、「夷隅地域にはさらに多数の国人領主が存在していたと思われる。（中略）中淹城、椎木城などは確実な形で文献史料の上に名を残すことのできなかったこの時代の国人領主の拠点であったと考えてよいだろうし、やや古くなるとは思われるが、小高城もやはりここを拠点とする国人領主のものであった可能性をもっている。（後略）」

とされ、この夷隅の地域に多くの国人領主が存在していた可能性を示唆している。

そして、応永23年（1416）に、時の関東管領上杉憲秀が上総を本拠として乱を起こすことになる。憲秀の乱は、翌年の応永24年（1417）に憲秀自身が自刃することにより一応の結着を見るが、その後憲秀の残党によって上総本一揆へと発展していく。上総本一揆は、応永25年（1418）と応永26年（1419）の2回にわたって起きているが、この一揆に上総の国人領主たちも加わっていたと考えられている。この本一揆の鎮圧は、鎌倉府の追討軍によって成されたが、それ以後、この地域では盟主不在の混乱状態に入っていくことになる。

混乱の中で台頭してきたのが、里見氏や武田氏であり、万喜城を本拠とする土岐氏であった。

（2）万喜城と土岐氏

万喜城跡が戦国時代に土岐氏の居城であったことは、周知のことであるが、土岐氏がいつごろこの万喜城に換るようになったかについては、あまり知られておらず、その出自と系譜については不明の点が多いとされている。城跡の西にある土岐氏の菩提寺とされている海雄寺の古記録では、「応永19年（1412）に土岐頼元という人物が、摂津の国富山城より移り、領地を伊南、伊北、千町の三荘として……（後略）」とされ、15世紀初めに土岐氏が万喜城に換り、その後、為頼、為春と三代続いたと伝えられている。また、この土岐氏三代の位牌が海雄寺に伝えられており、土岐氏がやはり三代続いたことが記されている。

「會見院殿樋昌鑑大禪正門

明應元年壬子五月初一日

土岐兵部大輔源頼元公」

「慶含院殿海雄嚴心大居士

天正十一年癸未四月二十七日

土岐彈正少弼爲頼公」

「勇勝院殿明惠道哲大居士」

天正十八年庚寅七月初一日

土岐右京太夫頼春公」

しかし、この土岐氏三代説には、海雄寺に残る位牌が江戸時代中頃に書かれたものであることや、三代の間に隔たりがありすぎるということで、諸々より疑問が出されている。大野太平氏は『房總里見氏の研究』の中で、海雄寺の古記録を基に万喜土岐氏の祖を源時政とし、この時政が摂津国富山城より、応永19年に万喜城に移ったものと推定し、その後、光頼—頼金—岐判官—頼元—兵部大輔—頼房—彈正少弼—頼定—彈正少弼—入道慶岸—為頼—彈正少弼—頼春—右京太夫となる9代説を推定している。また、前出の『岬町史』の中で橋口定志氏は、海雄寺が、もと岬町椎木にあったことに注目して、土岐氏が当初鶴ヶ城にあり、その後ある時期に今の万

木の地に移動したと推定し、土岐氏の系譜を頼元・大輔・頼房・彈正・少弼・頼定・彈正・少弼・入道慶岸・為頼・彈正・少弼・頼春・右京・太夫の5代と考えておられる。そして、万木に移動したのを三代頼定の時と推定している。土岐氏についての研究を、大まかに述べたまでであるが、いずれにしても土岐氏の起源とその系譜については謎の部分が多く、『里見代々記』、『房總里見軍記』などの古書によても、その大要を把握することは困難といわざるを得ない。⁽¹¹⁾

しかしながら、夷隅町萩原行元寺の「金灌頂私書」奥書きに「元禄八年己亥八月五日於上総州伊南庄萬喜城内書写畢、筆者大乘坊豪秀」とあることや、天正2年のものとされる海雄寺文書においても、土岐・彈正・為頼との交わりを記録していることから、土岐氏が当時万喜城を拠点として活動していたことは、史実としてうかがえるところである。

この土岐氏と時を同じくして房總で勢力をほこっていたものに、安房の里見氏、上総の武田氏、正木氏がある。里見氏は、その出自が土岐氏とともに不明確であるが、15世紀中頃から16世紀初頭にかけて房總、とくに安房地域の国人層を従えて、勢力を拡大していった戦国大名であり、その力は後に北条氏と肩を並べる程のものになっていた。武田氏は、甲斐武田氏の流れをくむ武田信長が、15世紀中頃に上総真里谷城（木更津市）を築城し、芦南氏の持っていた芦南城（長生郡長南町）を落として、上総における活動を活発化していく。そして、その二代後の武田信清によって大多喜城が築城されている。大多喜城の築城は大永年間（1521～1527）と考えられている。

こうした中で土岐氏は里見氏と関係を深めていく。『里見代々記』によると、明応年間（1492～1501）に土岐頼元の娘が、里見成義に嫁したと伝えられており、また、土岐為頼の娘が里見義堯に嫁いでおり、里見氏と姻戚関係をもつようになっている。

天文7年（1538）に起こった第一次国府台合戦には、土岐氏が里見、武田、東金の酒井氏等と共に参戦している。この合戦は、当時相模、伊豆に勢力をもっていた北条氏綱と、小弓御所といわれた足利義明を盟主とあおぐ上総武田氏、里見氏などとの合戦であるが、北条軍側には、下総千葉氏、原氏が加わっていた。合戦の結果義明は戦死し、里見・武田・酒井・土岐氏側も敗れている。

しかし、この合戦の後里見氏は上総方面にも勢力をのばしていくことになる。武田氏と対立するようになり、武田方の諸城を攻略していく。そして、天文13年（1544）には、里見義堯の命により正木時茂・時忠が大多喜城の武田朝信を攻め、朝信は、夷隅町刈谷原で敗死している。これ以降大多喜城は、正木時茂が城主となり（『里見九代記』）後に、万喜土岐氏と対峙することとなる。また、上総の一部を勢力下に収めた里見氏は、永禄7年（1564）に太田資正と連合して後北条氏の北条氏康と戦うことになった。第二次国府台合戦と呼ばれる合戦である。

この合戦の結果里見軍は敗北し、里見方であった土岐氏もしだいに里見氏から離反し、北条方に属していくことになる。そして、土岐氏はその後里見方の攻撃を受けることになる。

『房総里見氏の研究』によると、まず最初の戦いは、天正16年（1588）9月に大多喜城主正木時堯の軍勢に攻撃されており、この時には勝敗はついていないとされている。

天正17年（1589）4月下旬には、序南城主武田信栄に攻撃されている。この時は、土岐氏の支城の一つである矢竹城主麻生主水助が、近郷の土民百余人を集めて矢竹城、高野城の両城から加勢し守ったという。

また、この武田信栄の攻撃の後の同年6月には、里見義康との間に大原町発坂峠において、合戦が行なわれている。この合戦でも土岐頼春は大勝している。

天正18年（1590）正月には再び正木時堯の攻撃を受け刈谷において戦っているが、頼春側の勝利となっている。

これら何度かの戦いにおいて、ことごとく勝利を納めた背景には、万喜城を本城とする土岐氏が優れた家臣団と、支城を合せもっていたことによると考えられている。これは、万喜五城と呼ばれる亀ヶ城、鶴ヶ城、矢竹城、高野城、一坂城であるが、このうち一坂城についてはよくわかっていない。そして、亀ヶ城には佐々駿河守、鶴ヶ城には鶴見弾正、矢竹城に麻生主水介、高野城に三階図書之助がそれぞれ守っていたといわれている。（『房総治乱記』）

またこの他、大野城、国府台城、布施城、小浜城等の支城群が土岐氏の領地であった夷隅、岬、大原の地域に配されており、この支城群が、それぞれ要所の押えとして機能していたと考えられている。

しかし、こうした基盤に立っていた土岐氏も天正18年（1590）豊臣秀吉の北条氏への攻撃により、命運を共にすることになる。この北条氏・小田原城への攻撃に先立って記された『毛利家文書北条氏人數覚書』の中に、当時の土岐氏の勢力を示す記述がある。それは、「一、とき少弼 万木ノ城、へひうか城、鶴ヶ城三ヶ所千五百騎」と記されたものである。しかし北条氏の滅亡後、徳川家康の家臣、本多忠勝・平岩親吉・島居元忠等数万の兵力のまえに、安房、上総、下総の他の諸城と同様、城主頼春は城をすて万喜城はその歴史に終止符を打たれることになる。

時に天正18年（1590）7月である。

その後、8月1日家康が江戸に入城している。

注1 平田満男氏の研究によれば、後北条氏重臣のひとりであった松田恵秀が花押を据えて発給した史料の中に万喜土岐頼春について記された文書が存在しているようであるが詳しい内容の検討はされていない。時期は天正期のものと推定している。

平田満男「松田恵秀に関する史料」『東国史研究』第1号 東国史研究会 昭和56年

3. 万喜城跡の概要（付図1, 2）

(1) 城跡の概観

城跡は、1章で触れたように大原町、岬町方向から夷隅川に向かって南北に突き出した山塊の北部に築かれている。現地踏査及び地形測量によると、城域は標高85.6mの山塊の頂部付近から北側の部分になり、その規模は南辺がやや不明確ではあるが、東西500m、南北800m程となり、夷隅川までを城跡として把えれば東西、南北ともさらに広がる大きな範囲となる。城跡の高低差は56mとなり、山城の特色を表わしているといえよう。城跡の主体は、標高60m～69mを測る山塊の尾根上に占地する平場で、大きく3つの郭に分けられる。なおこの平場は城山と呼ばれ、昭和54年から夷隅町で公園化している。北端は浅間台と呼ばれる標高56.9mの小高い山となっており、この浅間台の西端に現在の城跡への入口がある。浅間台上は20×20m程で高さ3m程の台状になっており、檜台として北側の守りに備えられていたのであろう。この高台からは夷隅川を挟んで西南の国吉、北の松丸、北東～東の平野部が一望のもとに見渡すことができる。現在、この檜台をコの字状に削り落して浅間社が祀られている。この浅間台下の北西の突出部に曲輪aがある。幅20mほどの平坦面となっている。また、浅間台の西、南、東の斜面は削り落しがされている。浅間台から南第III郭に向かう地域は、北西方に向かって開いた湾状になっているが、この北辺は丘陵端を成形して幅2m、高さ3m程の土壘としている。土壘の両側は削り落しがされている。

この土壘と浅間台南の民家のあるあたりは、2～3ヵ所曲輪が存在する。そして、土壘上やや南側は幅10m程の平坦面となり、堀切りAのある所へと至っている。堀切りAはV字状に削り落とされており、この間を南へぬけると、湾状になった地域に設けられた曲輪群bにつながっている。堀切りAの東は、城跡の裾に設けられた幅20m、長さ80m程の腰曲輪となって一段低くなり、浅い窪地をへだてたさらに下に、半月状の幅16m長さ30m程の曲輪が設けられ、東北側の古道イへと至っている。古道イからは食い違い状の登りとなる。また堀切りAの北には、長さ8m幅3m高さ3.2mの台があるところから、この台が樹形として機能し、古道イが虎口である可能性が考えられる。

曲輪b群からIII郭への登り道は、現在は幅2m程の直線的な道であるが、以前（昭和3年に最初に公園化された頃）はこの道ではなくIII郭の真下にある民家の、ほぼ直角になるあたりから堀切りAの方向へのび、虎口からの道と合流していた細い道が、存在していたと伝えられる。また民家のある辺からIII郭までは、やはり幅7.5m程の切り通しとなっているが、ここも以前にはかなり狭いものであったという。曲輪b群最上部とIII郭との高低差は10m前後を測り、III郭の北の縁辺は削り落しがされている。さらに、曲輪b群の東で城跡の縁辺には地形に沿って、曲輪c群が腰曲輪となって存在する。腰曲輪は二段に分けられ、二段目と曲輪b群との高低差

は10m程、一段目と二段目との高低差は5m程となっている。一段目は幅20~10m、長さ70m、2段目は幅10m~7m、長さ80mの規模である。このC群の北には山裾へ向かって幅2m、深さ2m程の溝が掘り込まれており、主郭部への敵の侵入を断っている。

III郭周辺

III郭は、城の主郭部（I～III郭）の北西端に設けられた平場で、中央の登り口を境にして西と東に2分割されている。西側と東側との高低差は約2m、またII郭と東側との高低差は約2mである。西側は東西44m、南北42mのほぼ方形を呈しており、この北端は約1m程の高い土壇となっており、現在稻荷社が一画に祀られている。また東側およびII郭へと続く南東部を除いた三方は、削り落しがされ急崖となる。東側は東西53m、幅15~30mの平場となり西から東へ幅広くなっている。このIII郭からII郭西縁、井戸跡を経てI郭に通じる道が残っており、往時はここを城内の通路として利用したのである。

III郭西側の城の縁辺は、高さ5m程の大規模な削り落しがされ、さらにその下に曲輪群がある。曲輪h群は、城下の水田面から三段階に造られており、その高低差は各々2m程である。また、この曲輪h群から北に向かう山塊の突出部に幅4m程の堀切りBが存在する。この堀切りは、突出部角をえぐって造られており両側は絶壁となる。堀切りの底部は平坦でなく高低差6m程の斜面となる。堀切りを北に進むと広さ30m×10m程の平坦部に至るが、この一画に標高45.7mで、10m×7m程の広さの高台がある。ここは、曲輪b群の存在する城跡北西の済状に開いた部分に浅間台を挟んで対置しており、防衛施設の一つと考えられる。

II郭周辺

II郭は、本城跡の主郭部のうち、最も広い面積をもつ平場である。平場は東西26m、南北30mの広さをもつ。この一画（北西隅）に高低差約7m程の高台が存在する。高台の上は、東西5m、南北8m程の平坦面となり、ここに物見を置いたものと考えられる。地元ではマス台と呼んでいる。現在は城跡公園となり展望台、城跡の碑、休憩所が設けられているが、ここからは城の周囲が手にとるように観え、東方はるかに太東崎から和泉浦を望むことができる。

II郭東側は、高低差10m程の削り落しがされ、曲輪d、eが設けられている。dからeは一続きとなっているが、それぞれに3段ほど高低差をもたせている。特にII郭とIII郭の境の北東側では、高低差が著しく5m程となる。

II郭西側には、平場より4m程低いところに井戸跡が残っており、現在でも湧水が湧いている。この井戸には、万喜の姫の鏡が落ちていると伝承されている。井戸から西北に向かう斜面には、6段から成る曲輪k群が設けられる。この曲輪に沿って井戸からの排水施設と考えられる細い溝が存在している。さらに、この曲輪の西縁は、土壘状に整形され急崖となり、西縁の曲輪i群が直下に存在している。この曲輪i群とその北の曲輪h群との間には、城跡の東側で見られたような裾部へのびる幅のせまい窪地があり、古道ウとなっている。この道のあた

りを滝の沢と呼ぶが、城が攻められた時ここから水を流し、水の音に似せ敵に兵糧や水が豊富にあると思わせたと伝承されている。

また、II郭とI郭との間には、堀跡が存在しており⁽⁴⁾発掘調査の結果幅10~13m、深さ1.8mの規模を有することが確認された。

I郭周辺

I郭は、近世城郭では本丸にあたり、本城跡では主郭部の南端に位置している。南西から北東に長い平場となり長さ86m、幅30~20mの範囲となる。II郭との高低差は5~6m程である。このI郭は倉の台と呼ばれ、古くから炭化米が出土することが知られていたが、調査の結果、炭化米はこの平場の表土中に広範に散布していることが確認され、また礎石を伴う遺構も検出されていることから、倉跡および城に関連する建物が存在していたと思われる。II郭からの登り口は、井戸跡辺りから西側を通ってI郭に至る道が残っている。南縁から南東縁に3ヵ所土壘状の高まりが認められるが、南隅のものが最も大きい。高低差3m程で、上幅は3m程あり、主郭南側の搦手を監視する橹台として機能した可能性も考えられる。

このI郭の周囲は、井戸側からの登り口を除いて削り落しがされ、特に南西部は顕著である。I郭南の崖下には曲輪f群が存在する。二段階に整形された腰曲輪となり、上段では幅6m、長さ34mの平場をもち、下段では幅13m~5m、長さ30mの平場となっている。ただ、下段の平場はなだらかな斜面となり、2.5m程の高低差をもっている。I郭と曲輪hの上段との高低差は約9mであり、上段と下段では高低差約10mとなる。上段の腰曲輪は、I郭西側の曲輪gおよび堀切りcへと続いている。この曲輪fとgの境から城跡のある山塊の尾根が南方へのびているが、この境に接する尾根上に樹形と考えられる遺構が存在している。曲輪fと高台の高低差は、約3mであるが、この南側では急崖となり、約5m~7mの削り落しがされている。上部はI郭側に、一辺12m程の正方形の平場をもち、この平場から南は尾根の両端を土壘状に残した切り通しがつくられている。切り通しの幅は1.5m程で高さは2~3mである。切り通しをぬけた先端は三角形状となり、ここから曲輪gから南側が眺望できる。

さらに、II郭南東隅からI郭の下、曲輪hの上段を経て曲輪gから南の尾根づたいに、城下南側に位置する海雄寺の脇へと至る細道が続いており、この道が本城の搦手になるものと考えられる。そして、この搦手の監視を目的とした遺構が尾根上につくられた樹形であると思われる。

I郭の東には、細長い尾根が延びている。これを妙見台と呼び⁽⁵⁾尾根の先端下には、北辰妙見大菩薩をまつる天台宗三光寺がある。II郭からこの尾根へと続くあたり（曲輪eとfの境）には、土壘状の高まりが認められるが、尾根と接するところで、削り落しがされており容易には尾根上に登ることができない。尾根の両側は数ヵ所に削り落しがされ、東からの敵の進攻を防いでいる。また尾根上は細い道が先端部へと続き、先端部の一画に高低差1.5m程の高まり

が認められる。おそらく城の東側の監視を目的とした施設が存在していたと考えられる。

今回地形測量を実施した範囲について万喜城を概観してきたが、現地踏査によると海雄寺あたりまでの南の山塊に連なる尾根は、まだ、数多くの堀切り、削り落しがされていることが確認されており、また海雄寺付近にも曲輪が存在していることから、本城はかなり広い範囲に展開していたようである。

注1 昭和54年、ここにグランドを作る際に埋められ調査時においては平担となっていた。また藤九郎彦氏や大多和見紀氏の万喜城跡に関する記述（引用・参考文献参照）によれば、この堤跡は浅い空堀とされて報告されている。

注2 注1の藤九郎彦氏および『日本城郭大系6・千葉・神奈川』の万喜城の項では、本書でII郭内のマス台とした橋台を妙見台として報告しているが、城周辺の聞き込み調査では地元の方はこの尾根の先端を妙見台と呼んでいる。

（2）城跡の周辺

万喜城跡の主要部の概観は以上のとおりであるが、次に城跡周辺に存在する寺院、小字名等について触れてみたい。

城跡の周辺には、西側に上行寺、海雄寺の2寺、東側に三光寺、桂林寺の2寺の計4寺が存在している。

上行寺は、日蓮宗の寺で永承3年（1048）の開基と伝えられ、当初は真言宗であったが弘安3年（1280）に日蓮宗に改宗されている。寺には正徳5年（1715）に再建の記録がある山門が残っている。

海雄寺は、曹洞宗の寺で元岬町椎木に土岐氏の菩提寺として開基されたが、天正2年（1574）に万喜城主土岐為頼がこの地に移し僧慧繼を招じて中興開山したと伝えられている。現在は無住で小堂が残っている。この海雄寺には土岐氏を知る資料として土岐氏三代の位牌木像、墓碑がある他、「万木の寝釈迦」とよばれる釈迦涅槃像が安置されている。この像は、近郷の信者たちの淨財で造られたもので全身いっぱいに人名が刻まれている。

三光寺は、天台宗の寺で北辰妙見大菩薩を安置している。この寺は土岐氏が万喜城下妙見社の別当寺として大原町下布施より移したものといわれ、かつては末寺10ヶ寺を有し伊南三ヶ寺のひとつとも伝えられている。

桂林寺は、浄土宗の寺で土岐氏内室の開基といわれ、為頼室の墓がある。現在、小堂が存在している。この他城下には日蓮宗法蓮寺があったが寛文年間（1662-72）にこの地から勝浦市鶴原に移ったとされている。

城周辺の字名には「伊南宿」「内宿」「伊保宿」「築場宿」など宿場に関する名と「天名」「車田」「出田丸」「御領」「松丸」「楽町」などの城跡に関連すると思われる地名が残っている。このうち「内宿」は「丸の内」とも呼ばれることから大手虎口の付近をさすものと思われる。

「楽町」は万喜城の城下町で、当時の組屋敷のあった所といわれ、六十二間、二十四間の屋敷割が今でも残されている。この他寺に関連する字名として「坊谷」「海雄寺谷」「海雄寺前」「上行寺前」などの地名が残っている。城跡の主要部は「城山」と呼ばれ元禄6年(1693)に画された万喜村絵図には「御城」として示されている。^{〔注1〕}(第II-2)また城跡の西北の「車田」と呼ばれる地区より軒丸瓦と軒平瓦の一対が発見されている。この瓦は中世半ば以後の特徴をもち、近江安土城跡出土の金箔瓦と瓦当文様と近似していることから万喜城が営まれていた頃に使用されていたものと考えられている。

注1 原図は夷隅町万木の旧名主平山功氏宅に保存されている。図に示した絵図は昭和51年に渡辺包夫氏が模写したもので、現在千葉県立総南博物館に所蔵されている。



第II-2図 万喜村絵図

4. 発掘調査とその概要（第II 3～6図）

(1) 調査方法と調査経過

調査方法

発掘調査は、前章城跡の概要でII郭とした平坦部南面と、I郭（倉の台）の平坦部に遺構確認のためのトレンチを6ヵ所に設定して行なった。調査の都合II郭を1区とし、I郭を2区として表記し、1区に3ヵ所、2区に3ヵ所トレンチを入れ各トレンチの番号を東側からそれぞれ、No.1トレンチからNo.3トレンチとした。検出された遺構には001号跡から順次番号を付し、出土した遺物には0001から順次番号を付して取り上げをおこなった。遺構平面図（トレンチ）の実測図は平板実測でおこない、1区については全体を100分の1の縮尺で一括して作図し、2区は全体を100分の1、各トレンチごとに20分の1の平面図を作成した。トレンチの断面図は全部20分の1で作成した。各トレンチは地山である泥岩を含む黄褐色土層までを目やすとして掘り下げを行い、遺構を確認した段階で止め遺構の精査、写真撮影、実測をおこなった。トレンチの発掘面積は1区で93m²、2区で77m²、総計170m²である。また調査中に城跡および周辺の踏査をおこない、城跡の把握に努めた。

調査経過

調査は昭和59年11月10日から11月19日までの間に実施した。

調査日誌抄

11月10日

午前中に調査区の環境整備後、1区、2区にトレンチを設定する。午後調査区の写真撮影の後、1区トレンチから調査に着手する。

11月11日

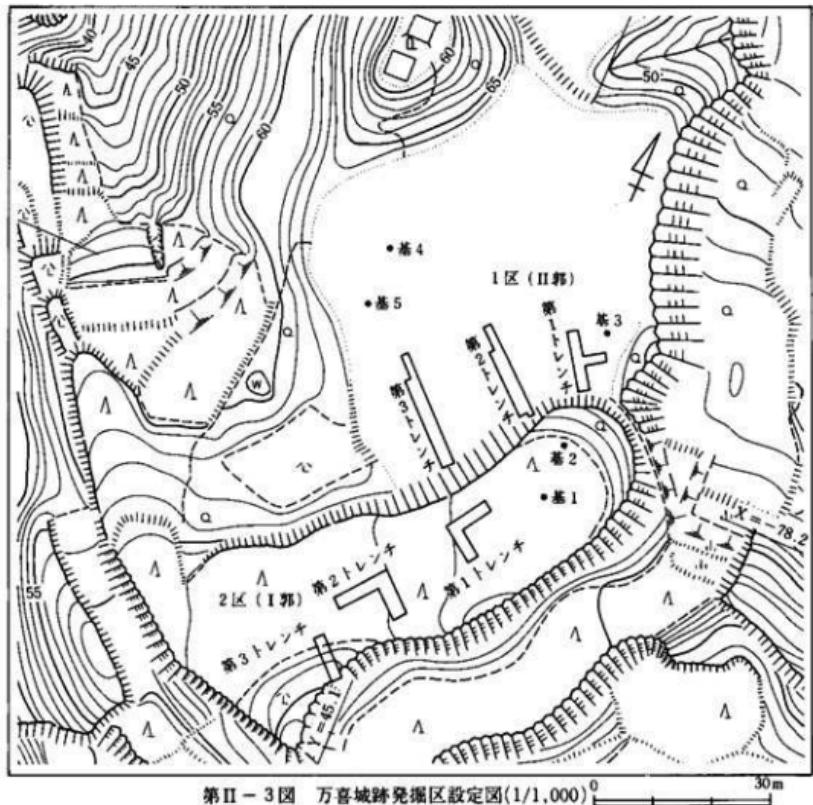
前日設定できなかった残りのトレンチを設定する。II区第2トレンチ西側で炭化米を多量に含む落ち込みを検出。掘り込み面が不明のため、サブトレンチを入れ確認する。炭化米はII区のトレンチの表土中全体に散布している。I区第1トレンチでは堀跡の上面を表土より20cm下で検出する。周辺の人の話では堀跡を水田として利用していたことが判明する。

11月12日

1区の各トレンチは旧水田面下で青灰色の粘土層を検出。表土下1.50mである。1区第2トレンチ北側で第2層中より土器検出。また同トレンチ南側では、青灰色粘土層下より常滑の瓈破片が出土している。第1トレンチは堀の東限を確認するため東西方向に新たにトレンチを設定する。2区第3トレンチでは炭化米の散布範囲を実測する。

11月13日

1区トレンチは、第3トレンチ、第2トレンチのうち2～3ヵ所小規模に試掘をおこない地



山を確認する。2区第1トレンチでは、第2層上面でピット群を検出。また同トレンチ北側では第4層上面で礎石2カ所を検出する。

11月15日

1区の各トレンチの断面実測。2区第1トレンチピットの精査。第2トレンチの炭化米の落ち込みを003号跡とし、断面の実測をする。

11月16日

1区の各トレンチおよび、2区第2トレンチの平板実測。雨のため、午後に予定していた現地説明会を17日に延期する。周辺の調査を行なう。

11月17日

1区の各トレンチの埋め戻し。2区第1トレンチの平板実測を行なう。午後より現地説明会を実施する。約60名の参加をみた。

11月19日

写真撮影の後、2区第1～第3トレンチの埋め戻し作業を行ない、発掘器材を撤収し調査の全日程を終了した。

(2) 調査区の概要 (第II-3, II-4図)

1区 1区 (II郭) の調査は、南側のI郭との境に堀跡の規模を把握するために、3ヶ所に幅2mを基準としてトレンチを設定した。

土層 第1トレンチから第3トレンチの土層は、ほぼ同じ堆積状態である。表土下80cm前後で、旧水田面の上面である腐食土層が数センチ堆積しており、その上層に2～3層認められた。この土砂は、昭和54年に夷隅町が城跡の公園化に伴いII郭をグランドにするために埋めた時のもので、木の葉、枝などが多く含まれていた。また、それ以前には杉の木を植林しており樹令25年程の木根が残されていた。堀跡と考えられる埋土は、この腐食土の下5層で全体に粘土質であった。また、堀は2層から堀り込まれているが、北側の平坦面では表土下1m程まで褐色土、黄褐色土、暗褐色土、明褐色土の順で板築状に固く踏み固めが認められており、城築上に伴うII郭造成の際には、相当大規模な工事が行なわれたことを示唆している。

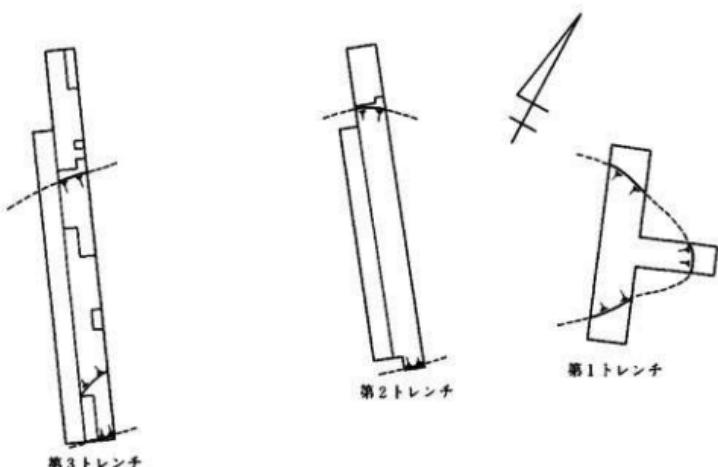
遺構 堀跡を確認した。東側はII郭の平坦部を8m程残した地点から掘り込まれており、東側はこの結果土橋状となって、I郭東側腰曲輪へと続き濠手方向へとつながっている。また、西側井戸曲輪方向への続きは今回の調査では確定できなかった。

堀の規模は幅10～13m、深さ1.8mを確認した。I郭側の立ち上がりは急傾斜で、崩落した土砂が堆積している。II郭の平坦面の方では、底面から直線的に斜めに立ち上がるところ(第1、第2トレンチで確認)と、第3トレンチのように階段状となり最下段の立ち上がりがわずかにオーバーハングしているところが存在している。

前項で水田として城跡が利用されていたことに若干触れたが、水田面は表土下60～70cm下であり、実際の堀はそれよりさらに深いものであったことが確認された訳である。最下層まで粘土質土が堆積していたことを考えると、この堀が帶水しやすい性格を有していることから、空堀としてではなく水堀として機能していた可能性も否定できないところである。

遺物 (第II-6図) 第1トレンチから第3トレンチの堀跡覆土より出土した遺物は、いわゆるカワラケと呼ばれる土師質の皿形土器が主体を占め、美濃・瀬戸の灰陶碗破片2点、同鉄釉陶器片1点、常滑の甕破片3点、中国産染付碗の破片3点、同褐釉の茶壺と考えられる破片1点が出土している。皿形土器は全体で33点が出土しており、うちほぼ完形のもの1点、底部9点が含まれている。

1～3は土師質の皿形土器である。1は底部から直線的に外方に開く器形を呈する。ロクロ成形で底部は部厚くつくられている。口径9.1cm、底径7.0cm、器高3.25cmを測る。約2/3が遺存



第II-4図 1区(II郭)遺構検出状況図(1/300)

している。色調は黄褐色を呈する。2, 3は底部である。2は底部立ち上がりに稜を有し、丸みを帯びている。1と同様、ロクロ成形で底部が部厚い。皿形土器はすべて同様の成形方法でつくられ、胎土に若干砂粒を含み焼成はあまくなっている。

4と7は美濃・瀬戸系の灰釉碗破片で、4は口縁部、7は高台付の底部である。釉は淡黄緑色で内外面ともに施釉されている。胎土は灰褐色で極く小さい砂粒をわずかに含んでおり緻密である。7は高台内にロクロ成形痕を残す。編年では、大窯期で16世紀代となるようである。4は第3トレンチ、7は第2トレンチの覆土中より出土している。

9は常滑産の斐觸部破片である。外面は赤茶褐色、内面は暗灰褐色を呈する。胎土は砂粒、小石を含み、焼成は良好で堅密である。第2トレンチの堀跡内、青灰色粘土層から出土している。時期的には16世紀代の年代が与えられるようである。

2区 (1)項で触れたように2区では3ヶ所にトレンチを設定した。2区(I郭・倉の台)では遺構の確認と、南側土壘の構築状況を把握するのが目的であった。

第1トレンチ I郭の中央部にL字状に設定した幅2m、長さ7m、6mのトレンチである。

土壘 造構の確認面が2層にわたっていることが判明した。層序は、表土である黒褐色土の下に炭化米が散布した暗茶褐色土層が、厚さ20cm前後で堆積し、その下層に暗褐色土層、さらに固くしまりのある黒色土が厚さ20cm程続き、地山で最下層の黄褐色土(泥岩ブロックを多く含む)となる。この暗褐色土の面から小規模な落ち込みと、ピット群(001号跡)が掘り込まれており

その下層の黒色土層上に 2 カ所、柱の礎石とおもわれる遺構(002号跡)の一部を検出している。第 II - 5 図に示したトレーナー北壁側の土層断面には、この黒色土が明確に見えられている。また、ピットの掘り込まれている西側の部分は、黒色土の上に 4 層に区分される土層が板築状に堆積していることが確認されているが、このことからも I 部のこの付近では、2 期にわたって遺構がつくられたことが推定できる。また、黒色土層より上層ではすべて炭化米を含んでいた。

遺構 遺構はトレーナー西側の第3層にピット群が存在しており、トレーナー側では第3層上面に小規模な落ち込み、第4層および7層(ピット側では黒色土上層で板築がおこなわれている)上面で、建物の礎石が検出されている。

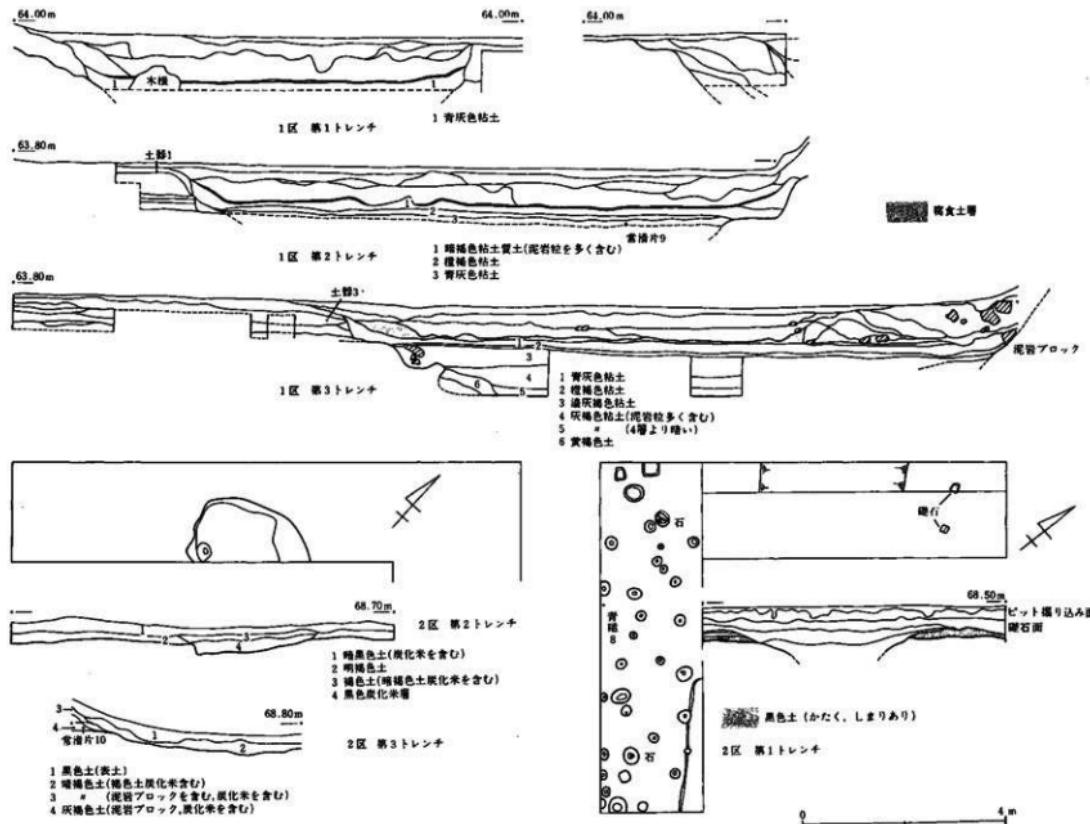
ピット群は、34 の大小のピットから構成されている。方向性、規模が一定していないため、また限られた範囲内のため各ピットの関係を明確に見えることはできなかった。共通していたのは、1 区(II 部)のトレーナーで確認された灰褐色の粘質土が充填され、非常に固くしまりのある状態になっていたことである。また、この内の 3 カ所には、灰褐色粘質土に泥岩礎を伴うものが存在しており、ピット群が柱穴の機能より、礎石のかわりとして機能していたことの可能性が大きいと考えられる。ピットの規模は径 30~10cm、深さ 31~11cm を測る。また平面形は、北壁側で検出された 2 カ所のピットの他は、ほぼ円形を呈し、北壁側の 2 カ所は、一辺 30~22cm の方形を呈している。また、トレーナー南東隅でピット群に接して浅い掘り込みが検出されたが、性格は不明である。これとは別にピット群と同じ面から掘り込まれている落ち込みが、北側のトレーナーに存在する。この遺構は前述した黒色土層の下まで達しており、断面をみると溝状の掘り方となるが、調査の期間上全体の把握ができなかっただため、性格は不明である。あるいはピット群を囲む遺構かもしれない。

礎石は、北側のトレーナーで 2 カ所検出された。黒色土層に埋め込まれた状態で上面が確認できた。このうち北寄りの石は花崗岩質で固く、一辺 19cm × 16cm × 10cm × 15cm の台形を呈し、最大厚は 8cm であった。また南寄りの石は、この地域の地山である泥岩層から切り出した礎で、一辺 15cm 程の正方形を呈し、厚さ 6cm 程であった。2 個の礎石の間隔はそれぞれの石の中心から 87cm を測り、配列の方向は南東から北西に並んでいる。

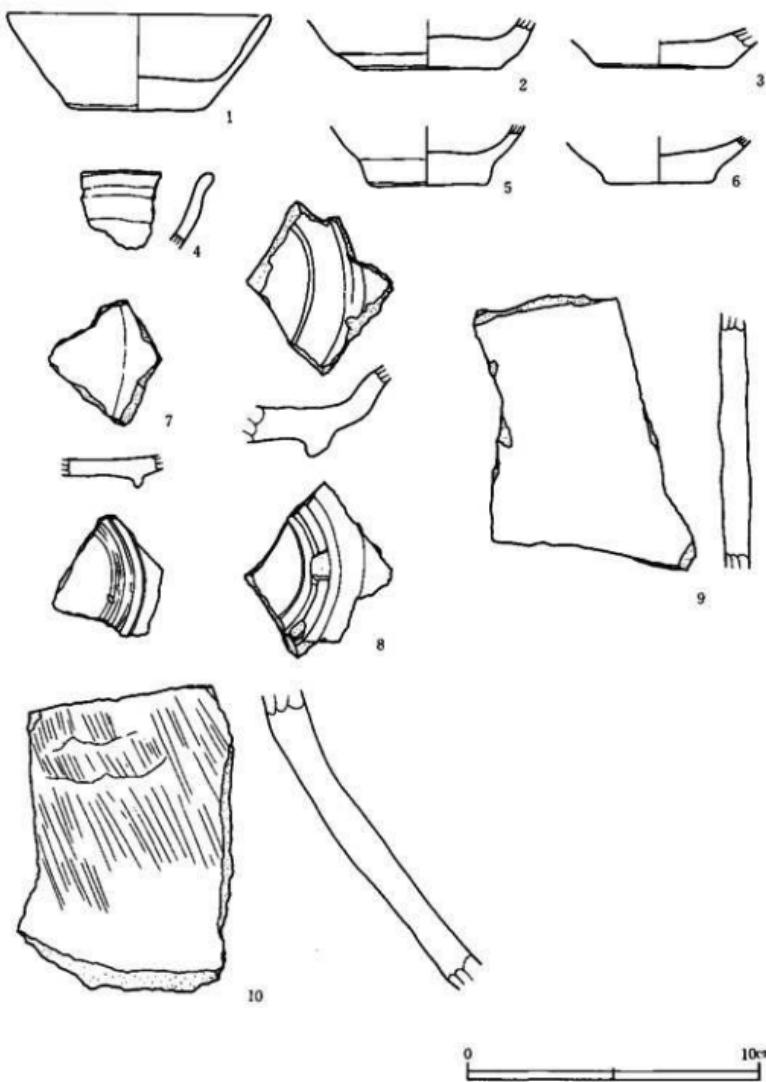
遺物(第 II - 6 図) 本トレーナーから出土した遺物は、土師質の皿形土器の破片 22 点、常滑窯の甕の破片 1 点、中国製青磁皿破片 1 点である。皿形土器 22 点のうち底部は 16 点含まれている。

5 は皿形土器の底部である。部厚く突出し平底となる。高台を意図しているのであろう。色調は黄褐色となり、胎土に若干砂粒を含む。焼成はあまり、器表面は施く水で洗うとザラザラした状態になる。これは皿形土器全体に共通している。

8 は中国製の青磁高台付皿の底部である。礁と呼称される形態のものであろう。器表面はガラ質で光沢のある青緑色を呈する。高台内側は釉が薄くなるが全体に施釉される。断面の施



第II-5図 トレント断面図及び遺構実測図(1/80) ■遺物の番号は鉢図と同番号である。



第II-6図 トレンチ出土の遺物(1/2)

釉のない部分は灰褐色を呈す。胎土は緻密である。高台端に目砂が付着している。時期は16世紀の年代が与えられるが、15世紀代の可能性もうかがえるようである。

第2トレンチ I郭のはば中央に幅2.5~2m、長さ10m、6mにL字状に設定したトレンチである。

土層 層序は3層に区分され、1層暗褐色土(炭化米を含む)、2層明褐色土、3層黄褐色土(泥岩質)となり第3層は地山である。1層は30~15cm程の厚さであり炭化米が散布している。

遺構 L字トレンチの西側で土壤状の落ち込み(003号跡)が検出された。この遺構は第2層上面から掘り込まれており、掘り込み面および遺構内では炭化米が多量に出土している。遺構覆土第2層はこの炭化米が極めて多く、漆黒色を呈する土層であった。この掘り方の最大径は2.35mを測り、断面では皿状を呈している。底面は起伏がそれ程なく、西端に深さ10cm程のピット状の掘り込みを検出した。遺構の性格は不明である。

遺物(第II-6図) 炭化米と土師質の皿形土器の破片26点が出土している。土器はすべて表土中からの出土である。なお炭化米としてサンプリングした中には大豆も含まれている。またこの他蠟石製の長さ46mm、太さ4.5mmの棒状の遺物が出土しているが、用途不明であるため図示は省略した。6は皿形土器の底部であり、わずかに突出した器形となる。立ち上がりは開きぎみで底面は平らである。胎土にわずかに砂粒を含み色調は黄褐色を呈する。器面は全体に脆い。

第3トレンチ 本トレンチは、郭の南隅に存在する土壘端に幅2m、長さ8mで設定したトレンチである。

土層と遺構 土壘の構築状況を把握するために設定したのであるが、土壘端が急崖となっているため調査できず端部の状況だけ確認した。土壘の盛土は最も高い所で4.2m程であるが、上面は平坦でなく台状を呈している。トレンチを設定した箇所は、その土壘の東端であり高さは平坦面から1.2m程である。土層は表土下に3層盛土されており、基底面から約30cmの高さまで版築状に積み上げ、その上面に盛った土で整形している。なお表土層から版築状に積み上げた土層中まで炭化米が出土しており、盛土の下層より常滑産大甕の破片が出土していることから、この土壘は造り直していることが考えられる。

遺物(第II-6図) 10は常滑産の大甕破片である。肩部上端と思われる。外面は赤茶褐色、内面は暗灰褐色を呈する。胎土は砂粒、小石を含み焼成は良好である。1区第2トレンチで出土した9と同じ特徴をもち、時期は16世紀代の年代が与えられる。

5. 結語

万喜城跡の調査は、地形測量、発掘調査とともに限られた範囲での調査であったが、これによっ

て得られた結果は從来の万喜城に対する概念を少なからず修正できるような問題を提示したと考えられる。

地形測量と周辺の踏査の結果によると、城跡の範囲は東西500m、南北800m程になると考えられ、この城が夷隅川の曲流を巧みに利用し、かつ城下に城に関する地名が多いことを考慮に入ると、城域は外郭を夷隅川辺りまでもつ広い範囲になると思われる。また城の遺構をみると、縁辺の曲輪群、削り落し、主郭をとりまく腰曲輪とその間に設けられた堀切り、縱溝、浅間台、マス台、妙見台に認められた櫓台跡、I郭南の掻手を防禦、監視する樹台と考えられる遺構、また大手虎口部に設けられた「食い違い」、II郭とI郭の境に確認された堀跡、城跡南側の尾根に認められた堀切りなどにみられるように城跡が占地している山塊の地形を充分活用した築城方法がとられていることが理解されるであろう。

城の主郭部を大まかに I郭～III郭に区分して概観したが、尾根を利用した各々の郭の配置からすると、その構造は君津市久留里城、木更津市真里谷城、万喜城の支城である大野城、鶴ヶ城⁽⁴¹⁾などに類似した城として把えることができよう。そしてそこには從来とかく単純な構造とみられていた⁽⁴²⁾この城跡が、実は久留里城などに匹敵するような、房總でも完成された中世城郭のひとつとして再認識される要素を含んでいるといえよう。

発掘調査は I郭と II郭を調査した結果、II郭では I郭との境に存在した堀跡が再確認され、從来考えられてきた規模より大きな規模となることが確認された。さらにこの堀が水田として利用されていたこと、堀内部に堆積した粘土層の存在と粘土層中から常滑産の甕片が出土していることから、堀が空堀としてだけでなく、水堀として機能していた可能性も指摘された。またII郭平場においては、版築状の盛土整形がされていることがトレンチの断面によって確認された。I郭では、古くから出土していた炭化米が表土層だけでなく土壌の基底となる土層中や柱穴列の掘り込まれた土層中にも散布していることが確認された。また柱穴列の下層に旧表土層が存在し、この面に礎石を伴う遺構が存在していたことが指摘された。

遺物は、中国明代の染付碗、青磁片、褐釉磁器片をはじめ、国産の美濃・瀬戸系灰釉碗の破片、常滑産の甕の破片、土師質の皿形土器などが出土しており、これらが年代的には16世紀代に相当する遺物⁽⁴³⁾であり、万喜城跡に関連するものであることが判明している。

これらの遺物や炭化米の出土状況および遺構の状況を総合して考えると、當時城内には倉庫棟の他に日常生活の場であった居館が存在していたことが推定される。またこの遺構群は I郭に限っていいうならば、たび重なる合戦のうちに焼失し再度改築された可能性が充分考えられると思うのである。「房總治乱記」の記述に従うならば、この万喜城は正木、里見、武田勢の攻撃を受け、その都度敗れることができなかつといわれているが果たしてどうなのだろうか。また炭化米が出土することについて從来から言われているように城主頼春が本多忠勝軍の進攻に際して城に火をかけ落ちていった結果だとするならば、表土下層や土壌下から出土した炭化米はど

んな意味をもつくるのであろうか。

限られた調査範囲であり、かつ城跡の全域をカバーするだけの概念図の作成もできなかったことは残念であるが、今後さらに本城跡の研究が進められることを切望する次第である。現在、本城跡は地元夷隅町によって「つつじの名園」として公園化され、保存されていることを付記しておく。

最後に、本調査にあたり終始助言をしていただいた渡辺智信、岡川宏道、柴田龍司、小高春雄、宮城孝之の各氏、調査に参加していただいた地元諸氏に記して感謝の意を表したい。

平山久夫、銀島聰、齊藤弥、鈴木利秋、石井トヨ子、君塚芳枝、重田敏子、実方のぶ、篠崎とし、中村登代子、山口延子、(以上地元諸氏) 高田孝雄(立教大学生)、関口和也(上智大学生)

注1 柴田龍司氏は「岬町史」の中で鶴ヶ城とこれに接する亀ヶ城をひとつの城として把え「鶴ヶ城」としてみておられる。

注2 「日本城郭大系6・千葉・神奈川」や篠原頼彦氏の調査(引用・参考文献参照)では、比較的単純な山城として把えられている。

注3 関口廣次氏の御教示による。

引用・参考文献

千葉県教育委員会編『千葉県中近世遺跡目録』千葉県教育委員会 昭和47年

千葉県編纂審議会編『千葉県史料 中世篇 諸家文書』千葉県 昭和41年

改訂房総叢書刊行会編「里見九代記」「里見代々記」「房總軍記」「房總里見草記」「房總治乱記」「毛利家文書抄」
〔改訂房總叢書第一輯〕所収 改訂房総叢書刊行会 昭和34年

大多和亮記「関東百城」有峰書店 昭和52年

大木衛他編『日本城郭大系6 千葉・神奈川』新入物往来社 昭和56年

大野太平「房總里見氏の研究」賀文堂書店 昭和8年

鶴岡節雄「資料海雄寺文書」「總南文化」11号 昭和44年

大類伸編「諸国廃城考」「日本城郭史料集」人物往来社 昭和43年

伊礼正雄、小高春雄他「上総久留里城」君津市教育委員会 久留里城発掘調査団 昭和54年

天野努、柴田龍司、永沼律朗「千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集」千葉県教育委員会 財團法人千葉県
文化財センター 昭和58年

「上総国・中淹城址」、「立教大学考古学研究会調査報告5」立教大学考古学研究会・中淹城址調査団 昭和58年
篠原頼彦「上総の万喜城」「千葉県東南部地区文化財総合調査報告書」千葉県文化財保護協会 昭和46年

橋口定志「岬町史・第三章中世」「岬町史」岬町、岬町編さん委員会 昭和58年

柴田龍司「岬町史・第十二章岬町の中世城郭」「岬町史」岬町、岬町編さん委員会 昭和58年

渡辺包夫、市原充「大多喜城物語」角川書店 昭和50年

- 小笠原長和、川村優『千葉県の歴史』山川出版社 昭和46年
- 川城昭一「万喜の動向と終焉—土岐・藤原萬喜両系図をめぐって—」『房総の郷土史』第12号 千葉県郷土史連絡協議会編 昭和58年
- 本吉正宏「万木城下発見の瓦」『総南博物館報—特集一』千葉県立総南博物館 昭和58年
- 改訂房総叢書刊行会編『房総通史』『改訂房総叢書別巻』 改訂房総叢書刊行会 昭和37年
- 森輝『夷隅風土記』千葉県文化財保護協会 昭和52年
- 伊礼正雄「中世城館址の調査」「考古資料の見方＜遠跡編＞」柏書房 昭和52年
- 高柳光寿・竹内理三編『角川 日本史辞典』角川書店 昭和41年
- 田口昭二「美濃焼」ニューサイエンス社 昭和58年
- 赤羽一郎他「常滑・渥美」「日本陶磁全集8」中央公論社 昭和52年
- 川戸彰「伊勢国造と古墳」『千葉県の歴史』18号 千葉県編 昭和54年
- 伊礼正雄・橋口定志 他『千葉県夷隅町大野城跡発掘調査概報』大野城跡緊急発掘調査会 昭和53年

写 真 図 版



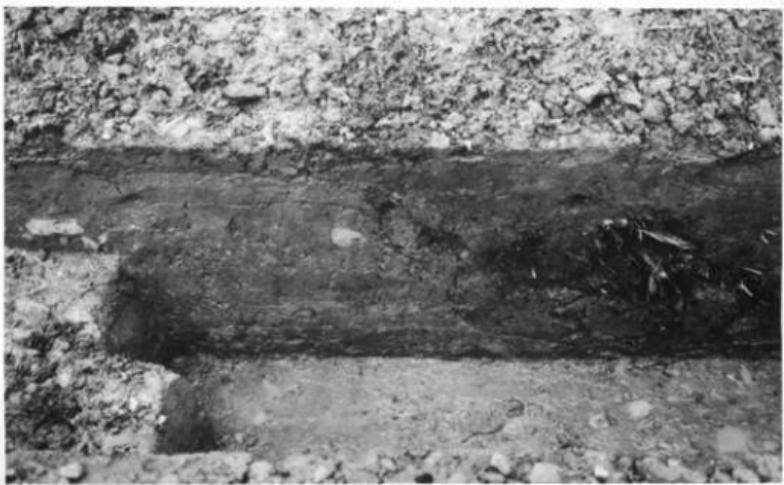
空から見た万喜城跡（1/13,000）写真提供 株式会社京葉測量（昭和43年撮影）



1区(Ⅱ郭)第
1トレンチ堀跡



同 東側



同 第2トレン
チ盛土及び堀
跡



1区(II郭)第2
トレンチ堀跡南側



同 第3トレン
チ 堀跡南側



同 第3トレンチ発
堀状況

2区(Ⅰ郭)第
1トレンチ柱穴



同 第1トレン
チ柱穴



同 第2トレン
チ003号跡



2区（I郭）第3ト
レンチ土塁盛土状況



- A. II郭高台を望む
- B. I郭西側堀り切り
- C. I郭東側削り落し
- D. II郭西側井戸跡
- E. II郭西側井戸下の曲輪 k 群



A



B



C



D



E



A. 浅間台東側下土塁

B. III郭北側の曲輪 b群



C. 南東側下堀り切り A



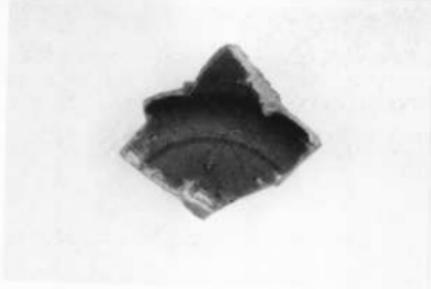
D. 海雄寺の土岐氏墓誌



E. 万喜城近景 (北西より)



F. 万喜城近景 (北西より)

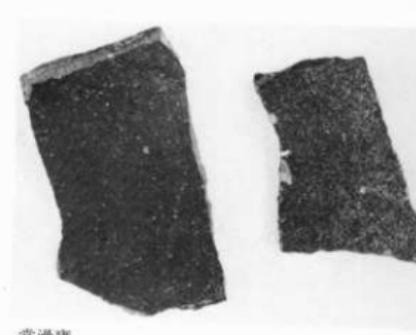


中国産青磁



中国産染付

左 2点 美濃・瀬戸灰釉
中 中国産褐釉
右 美濃・瀬戸鉄釉



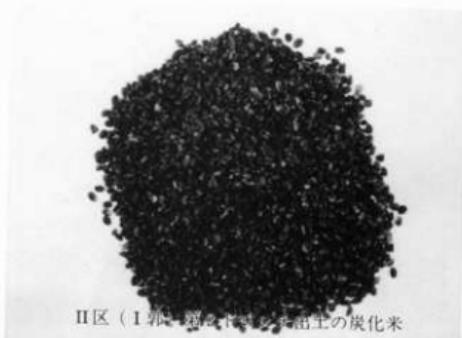
常滑器



土師質皿形土器



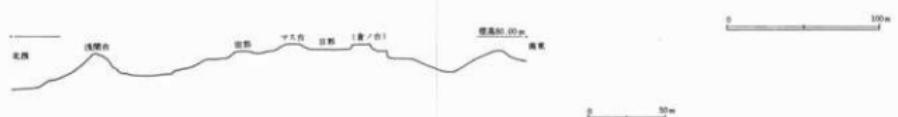
土師質皿形土器



II区(1号)碧玉器等出土の炭化米



付図1 万喜城跡地形測量図(部分) 1:2,000



付図2 万葉城跡概観図(1:2,000)及び範囲図(1:4,000)

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 5 集

一大崎城跡・万喜城跡発掘調査報告一

発行者 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 昭和 60 年 3 月 30 日

印刷所 常 正 文 社